

2008 年度 修 士 論 文

中国都市近郊農村の持続可能な開発における「都市型農業 の開発」のあり方

— 中国上海市松江区 C 鎮の開発を事例に —

Study on "Development of Urban-Type Agriculture" in Sustainable
Development of Suburban Farm Villages in China

李 潔
Li, Jie

東京大学大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻

～目次～

0	はじめに.....	1
1	中国都市近郊農村における農業の現状と課題——「現代農業園」の出現.....	2
1-1	中国の農村・農業・農民——中国の「三農問題」.....	2
1-2	中国の都市近郊農村が抱えている諸問題.....	4
1-3	「近郊農業」から「都市型農業」へ.....	5
1-4	「都市型農業」における「現代農業園」の開発.....	7
2	「現代農業園」の「問題」とは何か——先行研究の検討と予備調査の結果から.....	8
2-1	先行研究の検討——都市型農業、特に「現代農業園」開発にかかわる諸問題の研究における問題の所在.....	8
2-2	「現代農業園」に関する予備調査研究——「上海市金山区現代農業園区」を事例として.....	9
2-2-1	「上海市金山区現代農業園区」の現状の概要と特徴.....	9
2-2-1-1	調査手法.....	9
2-2-1-2	調査結果.....	9
2-2-2	「上海市金山区現代農業園区」における観光開発の試みとその問題点.....	11
3	日本におけるグリーン・ツーリズムの試みを鏡にして.....	14
3-1	グリーン・ツーリズムについて.....	14
3-2	日本長野県飯山市のグリーン・ツーリズムの試み.....	16
3-2-1	なぜ飯山市なのか.....	16
3-2-2	日本長野県飯山市の概要.....	16
3-2-3	飯山市におけるグリーン・ツーリズムの経緯と概要.....	17
3-2-4	飯山市におけるグリーン・ツーリズムにおける地域住民と農民の生活の質について——聞き取り調査から.....	18
3-3	地域住民の生活の質を高めるグリーン・ツーリズムのあり方を問う.....	20
4	都市型農業における地域住民の生活の質の問題を問いなおす.....	22
4-1	グリーン・ツーリズムと都市型農業の相違.....	22
4-2	都市型農業におけるグリーン・ツーリズムの可能性.....	22
4-3	都市型農業におけるグリーン・ツーリズムの課題.....	23

5 都市型農業の開発において何が必要なのか——上海市松江区 C 鎮 CL 村における現地調査から考える.....	24
5-1 問題の所在と研究の手法	24
5-2 上海市松江区 C 鎮 CL 村の概要.....	25
5-3 調査地の歴史的な位置づけ及び現状.....	25
5-4 開発の先頭に立つ近郊地域——上海市松江区.....	27
5-4-1 上海市松江区 C 鎮の開発と CL 村.....	29
5-4-2 現地調査の手法について.....	31
5-5 CL 村における農民生活及び開発の現状.....	34
5-5-1 CL 村における農民の生活の現状.....	34
5-5-2 CL 村の開発を巡って.....	36
5-6 農民と自然とのかかわり (CL 村をモデルに)	38
5-6-1 農村景観.....	38
5-6-2 生業と副業.....	41
5-6-2-1 主たる農業.....	41
5-6-2-2 副業.....	42
5-6-3 遊び.....	44
5-7 地域に生まれた伝統、文化とその他.....	46
5-7-1 松江名物——松江スズキ.....	46
5-7-2 松江の紡織業.....	47
5-7-3 農業から生まれた文化.....	48
6 都市型農業における人と自然との関係性.....	49
6-1 「農」からみた人と自然との関係性——CL 村の現地調査から.....	49
6-2 環境倫理学の視点からの人と自然とのかかわりの重要性.....	50
6-2-1 「環境持続性」・「社会的公正」・「存在の豊かさ」	50
6-2-2 多様な意味を持つ「生業」	52
6-3 「都市型農業」の開発のあり方の再考察.....	53
終わりに 都市型農業の未来への展望.....	54
参考文献.....	56
謝辞.....	58

0 はじめに

中国文明は農業からはじまり、6000 年前に遡ることができる。歴史学研究では、中国文明を黄河文明と長江文明の二つに分けている。黄河文明は畑作を中心に、長江文明は稲作を中心に、いずれも農業から生まれた文明である。そして、中国は今日においても、「農業大国」と称されている。

しかし、国際的な競争が激しい現在、中国は農業だけでは発展しにくい状況に面している。30 年前、当時の党中央軍事委員会主席であった鄧小平氏は中国国内体制の改革および対外開放政策（以下「改革・開放政策」という）を発表し、それ以降、積極的に外資を受け入れ、国内の経済発展は一気に加速した。一見、中国全体の経済成長はうまくいっているが、発展の不均衡で、都市部と農村部、沿岸地域と内陸地域の格差が深刻化し、農村・農業・農民、いわゆる「三農問題」は中国政府のもっとも悩まされている問題だともいえる。

農村問題は内陸農村と近郊農村二つの問題領域に分けられている。しかし、中国国内では、内陸農村や三農問題に関する研究が多くみられるが、都市と内陸農村の真ん中に立つ都市近郊農村に関する研究はまだ希薄で不十分である。とりわけ都市部の開発に伴って、都市近郊農村は開発するか開発しないか、農業を産業の主体とするか、あるいは工業化を推進するかの渦中に巻き込まれている。近郊農村を抱えている大半の地域政府は工業開発を選び、短期的に利益の獲得という選択をした。その結果、近郊農村の農地が急激に減少し、都市部の食料を供給するための生産基地も近郊農村から遠い郊外、あるいは内陸農村に移転しはじめた。一方、農業の効率的な生産と持続化及び都市部の緑地として、都市部の住民の自然とのふれあい、あるいは農村風景や農民生活を体験する場などの生態観光をもおこなうような「都市型農業」が要求されるようになった。（張放、2005 年）

1994 年、上海市をはじめ、多くの大都市における政策は「近郊農業から都市型農業への転換」を考えはじめた。この政策に応じて、多くの現代農業園が造られ、「現代農業園＝都市型農業＝近郊農村の再生」という社会的認識が広がっている。しかし、現代農業園の開発に伴ってさまざまな問題や課題が浮上してきた。論文「上海都市農業保護与可持続発展（上海都市農業保護と持続可能な開発）」（潘其雲、2005 年）の指摘によると、開発の際に、農民の移住先が確保されない、農地の補償金が少ない、移住後の再就職が極めて困難などの問題が多発している。潘氏の指摘した問題だけではなく、開発によって地域の農民たちは長くかかわってきた生活環境を失いつつある。農民の社会的環境や精神的環境は考慮されているのであろうか。この問題に対して、中国国内ではまだ議論されていない。

潘氏の指摘した問題は確かに重要であるが、地域の農民にとっての問題はそれにとどまらない。地域の農民たちが生活しているさまざまな環境が改変させられているのである。自然的な環境も問題であるし、また、地域社会の社会的環境も重要である、またそれにもまして重要なのが、精神的な側面である。開発によって、地域の農民の人たちの精神的な

環境の部分まで考察を拡げる必要がある。

本研究では、この問題を、地域の農民の人たちの精神的な環境の問題まで含めて研究を行った。研究の手法としては、農業開発の問題が起こっている現場の、地域住民に対して、精神的な深層の部分まで迫るようなインテンシブな聞き取り調査などの社会学的な調査を行うことによって問題の本質を探った。また、その結果を、環境倫理学で提起されている理念的な問題も含めて考察し、現在の都市近郊における農業開発問題の本質に迫ることを試み、日本での先進事例を比較検討することによって、今後の開発のあり方に対して多少の提案を行いたいと思う。

1 中国都市近郊農村における農業の現状と課題——「現代農業園」の出現

1-1 中国の農村・農業・農民——中国の「三農問題」

2000 年、湖北省監利県棋盤郷党委書記である李昌平氏が当時の国家国務院総理朱鎔基総理に「農民真苦、農村真窮、農業真危険（農民は本当に苦しんでおり、農村は本当に貧しくて、農業は本当に危険に面している。）」といった内容の手紙を送った。手紙の内容は中国の農村・農業・農民の苦しい現状を政府に伝え、中国国内では大きな反響が巻き起こった。（李昌平、2002 年）その後、農村・農業・農民は「三農」と略称され、「三農問題」が社会問題として注目されはじめた。「三農問題」はさまざまな課題を抱えているが、重点課題は、都市部との経済格差、農民の増収、農村の発展などの問題である。（石田、2005 年）

「三農問題」の裏には複雑な社会構造があるため、中国の農村と農業と農民の現状を概観するために、いくつかの典型的な問題について以下に整理する。

都市部への人口集中を防ぐため、1958 年から、中国政府は厳しい戸籍管理を実施してきた。戸籍は、「都市戸籍」と「農村戸籍」に分けられ、原則として農村戸籍の者は農業に従事し、都市に働きに出る場合は事前に都市での労働許可証を取得しなければならない。1980 年代に入ってから、戸籍の規制はようやく緩和され、多くの農民が都市へ出稼ぎに行った。こういった農民戸籍を農村に残したまま、農業以外の生業、特に都市内での工業に従事する者は「農民工」と呼ばれ、内陸農村から沿岸都市へと移動するケースが多い。しかし、戸籍にまつわる制限があるため、農民は都市での市民権を得られず、子供を学校に通わせることができず、できたとしても、その都市の戸籍がないという理由で高額の学費を支払わなければならないという問題が生じている。そして、彼らのおこなう仕事はもっぱら都市住民が嫌がる土木建築や清掃など、いわゆる 3K（汚い、危険、きつい）労働が多い。社会保障、医療保険、退職金や住居の分配など都市住民が普通に享受している待遇も受けることはない。（王文亮、2003 年）

そのような状況においても、大勢の農民は農業をあきらめ、故郷から離れ、都市部に押

し込む。決して楽な生活ができるわけでもないが、なぜ農民たちは都市部になだれ込みつつあるのだろうか。

もっとも大きな原因としては、安価に据え置かれた農産物によって、農民は非常に低収入となっていることが原因と考えられる。中国での農地所有制度が非常に厳しかったため、農地の転売、借用による大規模な農業はまず勝手にできなかった。限られた農地で収穫した食料を自給自足の分を引くと、1年で得られる純利益はわずかしかない。2007年の中国統計年鑑によると、都市部住民の平均収入は1年で11,759元（約18万円）¹であることに對して、農民の平均収入は1年で3,578元（約5万円）である。1990年のデータと比較してみると、都市部住民の平均収入は約8.5倍に増えたが、農民の収入は約5.2倍しか伸びていない。しかも、この格差は年々増大している。一方、都市部の工場で働く場合は、寮と三食付で最低約600元～800元（約9000～12000円）の月給がもらえるため、多くの農民が出稼ぎを選択する行動が理解できる。

しかしながら、都市部へ移動する人口の大多数は若者であるため、農村部の高齢化もとても目立った問題となっている。2006年の年末時点で、中国の農戸籍を持っている人口は73,742万人であり、全人口の56.1%を占めているが、農村社会基本医療保険を加入している人はそのうち5729万人で、農村人口の約8%にすぎない。農民の社会保障は極めて不足しており、農村に残された高齢者たちが病気にかかると、都市部の住民では想像できないような苦しい状態に陥ってしまう。

そして、農民の生活環境の苦しみは農業の衰退と直接に繋がっていると考えられる。基幹労働力としての若者たちが都市部へ流出し、農村の労働力は「高齢化・婦女化」²している。また、農村にいる農民の中に、農業をする時間を惜しんで、他産業に従事する人も増えている。その結果、農業経営が粗放化し、農業生産の効率はますます低下する。それに伴って、農村全体の経済状況が悪化し、水路や水利灌漑などの基礎施設の整備も軽視されてしまう。また、貧困から脱却するため、多くの農村は企業の誘致に力を入れ、経済発展を図っている。排水や廃棄物管理が不十分であったり、過開墾、過開発などの原因で、農村の自然環境が著しく破壊された例もたくさんある。結局、農業生産は「低投入—低効率—低収益」という悪循環に陥ってしまう。

中国政府も農村問題を重視しているとみられる。1998年10月に開かれた中国共産党第十五回中央委員会第三次全体会議（以下、「中共十五回三中全会」という。）では、農村と農業の問題を中心に議論をおこない、「農村の生産力の発展と農業現代化を促進し、農業の総合生産力を高め、農村経済の発展と農村社会の安定を図る」といった方針を強調した。

¹ 人民元—日本円のレート 1元≒15円

² 石田浩、「中国農村の開発戦略—農民は豊かになったのか」、関西大学経済・政治研究所、2000年、8頁

その5年後の中共十六回三中全会（2003年10月）では、「社会主義市場経済体制の若干の問題を整備することに関する決定」を発表し、都市部と農村部の二元的な経済構造の改革についての決意を示した。農村土地制度、農産品市場と農産業システムの保護、農村各種の税の改革、農村余剰労働力の再就職のサポートなどの内容について具体的に論じた。この会議の影響を受け、多くの大都市は「城鄉一体化（都市部と農村部の一体化）」というスローガンの下、都市と農村の共同発展、相互提携を模索しはじめた。これは農民や農村の地位を是正する第一歩だと高く評価すべきことである。長期的な目でみれば、農村の発展、農民の生活環境の向上、農業の振興なども期待されている。

しかし、都市農村一体化という政策によって新たな問題が引き起こされる可能性も非常に高い。一体化という名目を利用して、都市部の工業の中心を農村に移転する、農村の土地を無断に転用する、大規模な開発を進行するといった事態が発生している。政府として、いかに健全な法律と規制を作り出し、管理や監視システムを改善し、真の意味での農村と農民と農業を守るという役割を果たすのかはとても重要な課題ではないだろうか。

1-2 中国の都市近郊農村が抱えている諸問題

前節で述べた三農問題、農村社会階層、または農村流動人口などの研究は「農村社会学」の分野において展開してきた。中国における農村社会学の研究は約30年の歴史があり、比較的成熟した学問だとみられている。具体的には、中国の農村社会学は四つの研究テーマ群に分けられている。ひとつめは社会構造と秩序の問題であり、主に都市部と農村部、あるいは組織や階層間の関係性の研究である。ふたつめは農村の経済発展やインフラ問題、教育問題などの研究である。みつめは農村にかかわる政策や制度の研究である。よっつめは農民の権益問題に関する研究である。（陸相欣、2006年）

農村社会学では、農村におけるさまざまな問題を研究しているが、その中の「農村」という概念は「内陸農村」のことを指している。「都市近郊農村」は地理上の優位性を持っており、都市部の発展に依存しており、内陸より比較的に発展が良くて、問題も少ないという錯覚が起こりやすい。

日本の農村経済学研究者である石田浩氏は、「中国都市型農業の経済構造とその課題」という論文の中で、中国の大都市である上海の近郊農村について以下のように述べている。「農村調査実施前、筆者たちは上海郊外農村のイメージを膨らませていた。大都市上海は商工業が発達していることから、郊外農村は経済発展のチャンスに恵まれ、農家の余剰労働力はスムーズに農外産業にシフトし、農家経済を支え、農家経済は安定発展してきた。」（石田、2003年：249）

しかし、石田氏の調査によると、結果は必ずしもそうではなかった。内陸農村と比べると、上海の近郊農村は土地資源が不足しており、ほとんどの農家は零細農家であった。1970年代から、上海などの大都市では農村工業が盛んであり、1980年代に入ると郷鎮企業（鎮

や村が経営する地元型企业)はさらに発展し、農民は優先的に職を分配されて、農業以外の収入を得られるようになった。ところが、1990年代に入ると、大企業との競争力が足らず、郷鎮企業は相次いで倒産した。リストラされた農民は学歴や年齢・技術などの条件により再就職が困難であり、また出稼ぎの若者が内陸農村から大量に押し寄せ、ほとんどの農民はもとの零細農業に回帰せざるを得なかった。(石田、2003年)

しかし近年、都市近郊農村では、農民たちに対して、貧困から脱却する新たなチャンスが現れたのではないかと筆者は考えている。それは、都市部の発展に伴って、新規住宅地や工業用地の開発が近郊地域に移ったことによって、農地や居住地が国家に収用された農民は補償金を与えられ、場合によって、都市部住民の戸籍も得られるというチャンスである。都市住民の戸籍には、医療保険や養老保険もついてくる。普通、農戸籍から都市住民戸籍に切り替えことは非常に困難なことであり、農民にとっては、これはとても得難い貴重な機会だといえる。このような背景から、農地の転用によって、農業が衰退するだけでなく、自ら農業生産を放棄し、開発を待つ農民も少なくない。

ここで、既往の研究を参考に、現在中国の都市近郊農村が抱えている問題を以下の三つの観点からまとめてみたい。まずは農地を失った農民の生活保障の問題である。都市農村一体化や農村都市化などの流れの中で、土地の需要が年々増え、近郊農村の農地は相次いで収用・転用された。農民は相応の補償金がもらえるが、あくまで最低限の生活費の金額で、余裕のある生活をするためには、再就職しなければならない。しかし、農村余剰労働力の人口が膨大であり、教育レベルも低く、就職競争が激しい市場においては、農民の再就職は極めて困難である。(王文亮、2003年)

第二には、近郊農村で農業特惠政策に恵まれないという問題である。農業特惠政策とは、農産業を応援するため、2006年に中国政府は農業税を廃止し、穀物の買い上げ価格を引き上げ、米などの穀物を生産する農家に補助金を給付するなどの政策を取り上げた。ただし、農業特惠政策は穀物面積20ムー以上の農家に対してのみ適用される。(宗義湘、2007年)近郊農村の農業は零細農業が多く、主に野菜などの副産物に重点を置いているため、20ムー以上の穀物の生産面積を持っている農家はほとんどいない。国の農業特惠政策も近郊農村に対しては、あまり意味がなかった。

第三には、開発をめぐる政府と農民の対立という問題である。開発の話が政府から持ち上げられた際に、農民たちは今後の生活保障の問題を含めて、補償や分配などについて納得できない場合が多い。抵抗運動や集会、デモを通じて抗議するところもあるが、政府は違法活動と捉え、双方の対立が先鋭化してしまう場合が多い。(朱明德、2003年)

1-3 「近郊農業」から「都市型農業」へ

「近郊農業」とは、都市部周辺の近郊地区における、都市部住民の日常生活需要、あるいは食品加工業の必要な副産物(主には肉、卵、牛乳、果物、水産物と野菜)を供給する

ための農業である。(張放、2005 年)

1988 年、当時の都市部における副産物の供給不足という問題を解決するため、中国政府は「菜藍子工程（買い物かごプロジェクト）」を発表し、都市近郊で大規模な肉、卵、牛乳、果物、水産物と野菜などの副産物生産基地を作り、都市部住民の基本的な需要に対する供給を確保することを担当部局に指示した。その後、「近郊農業」という概念が広く使われるようになった。市場や流通などのシステムも整えられ、都市近郊の副産物産業が急速に発展し、1990 年代に入ると、副産物の不足の問題は概ね解消された。しかし、その後、都市部の経済発展に伴い、近郊地区では広域の土地を住宅開発や工業開発に回し、近郊農業の生産量は急速に減少した。かつ都市部住民の農産物需要量が大幅に増大し、近郊地区だけでは賄えなくなる危機に直面していた。1995 年から、近郊地区だけではなく、遠い郊外や内陸農村地域も積極的にプロジェクト「菜藍子工程（買い物かごプロジェクト）」というプロジェクトに取り組み始めた。このプロジェクトでは、都市から離れた郊外や内陸農村地域では十分な土地資源があり、労働力も相対的に充実しているため、大量生産・低コストを可能にする条件が整っており、短期間で市場シェアが獲得できた。近郊農業の市場での競争力はますます弱くなっていた。さらに、都市農村一体化や農村都市化の政策に加えて、近郊地区と都市部の境界線があいまいになり、近郊農業において、効率的、持続的な生産が求められるようになり、いわゆる「都市農業」への転換が要求される時代に入りはじめた。(方志権、2008 年)

1994 年になると、上海市政府は「都市農業」の発展に対する政策を都市計画に入れて具体的に検討しはじめた。1995 年、上海市は日本の大阪府と提携して、「都市農業国際共同研究」をおこない、1996 年に上海で「上海—大阪都市農業国際セミナー」を開催し、本格的に取り組み始めた。1998 年、北京で「中国都市農業検討会」がおこなわれ、「都市農業」という構想は全国で迅速に広がった。(張放、2005 年)

「都市農業」という用語が最初に学術語として用いられたのは 1935 年に日本の学者青鹿四郎が「農業経済地理」という雑誌で発表した文書であったといわれている。1970 年代後半から、アメリカの経済学者たちは「都市農業」について研究をしはじめた。現在、ほとんどの先進国で「都市農業」が展開され、形式もさまざまである。「都市農業」の初期段階では「大都市の住民による都市部における小規模な農作業」という狭隘な意味合いであった。しかし、現在では「近郊農業の生産機能の他、都市部の緑地、観光、教育、体験農業などを含む農作業」という多様な意味を含む概念になっている。今日中国国内では都市近郊地区における「都市農業」の展開が多くみられるため、「都市農業」を「都市型農業」と称するようになった。(張放、2005 年)

「都市型農業」は、従来の伝統農業の分散的ではあるが粗放的なやり方を根本的に解決しようと考えられた農業形態である。資本、技術、施設などを高度に組織化された生産体制へと改良し、集約的に農業をおこない、効率よく生産する。生産的な機能を果たす上では、都市部住民に自然環境との触れ合いの場や、農業体験、あるいは農村観光の空間を提

供するような観光や教育機能も期待されている。都市部の緑地不足の問題の解消にも、大きな役割を果たすのではないかと考えられている。現在の中国国内では、この「都市型農業」が持続可能な農業だとみられ、大きな希望が寄せられている。

1-4 「都市型農業」における「現代農業園」の開発

これまでみてきたように、「都市農業」は都市部の経済発展、近郊地域への拡張などの現象に伴って発生する農業である。また、伝統農業や近郊農業と異なり、より多様な機能が求められている。「都市農業」の展開や管理様式も国や地域によってさまざまである。「都市農業」が中国で登場してから、多くの研究者が国内外の都市農業に関する先進事例についての研究を始めた。特にヨーロッパのイギリスやドイツでの森林都市と田園都市、日本の市民農園やレジャー型農業、イスラエルの技術農業などは頻繁に取り上げられている。（葉軍、2006年）

そのなかでも、イスラエルの技術農業を事例とした研究が代表的である。イスラエルの耕地面積はわずか44万haで、国土面積の20%しか占めていない。ところが、現代科学技術と現代管理方式を採用し、高い投入・生産比率を示す高効率工場化の道を歩み、世界的に『冬季ヨーロッパの厨房』として有名である。（葉軍、2006年）中国では、「都市型農業」の発展はまだ初期段階であり、このような先行研究の政策への影響力は大きく、開発方法もイスラエルの技術農業をモデルに、比較的に単一になった。中国ではこれらの近代農業施設を「現代農業園」と称している。例えば、上海市の浦東地区にあり、国内で最初に設立された「孫橋現代農業園」はその代表であり、多くの研究者たちに注目されている。

「孫橋現代農業園」は1994年に、上海市の「近郊農業を都市型農業への転換」という政策に応じて造られた技術農業園である。農業園面積は最初の4km²から現在の19.7km²に拡大し、政府の出資率は70%以上に達している。先進な技術を用い、土地を有効に活用し、経済効果を高める市場ニーズへの適応をうまく進めた例として、国内の他の大都市の見本として多くの研究者から高く評価されている。宿泊施設等が備えられ、市民の見学や観光に対応できるようになっている。最近、環境教育の一環として学生に農業体験をさせ、有機栽培や減農薬栽培など最新の農業技術を参観させる学校も増え、農業園全体は学生向けの教育施設にもなっている。（朱明德、2003年）

上海統計局³の発表によると、2007年までに、上海市では合計12箇所の現代農業園が設置され、敷地の総面積は約350km²で、現段階では約58%の面積が開発済みである。総融資額は85億元（約1300億）以上に達し、26億元（約390億円）の基礎インフラの建設費の半分以上は政府が負担していた。12箇所の農業園には、生産業、加工業など約400以上の企業が集まっており、その半分は農業生産関係の企業である。昨年、農業だけの生産額は24億元で

³ 上海統計： <http://www.stats-sh.gov.cn/2005shtj/index.asp>

あった。今後の収益も上がる見込みだと予測されている。

上海市の現代農業園の開発によって都市型農業の時代の幕が開けられたといえる。2006年まで、全国で省や市の出資で作られた農業園は合計 500 箇所あり、県や地方のレベルに属する農業園は 3000 箇所以上もあるという。行政区⁴ごとにひとつの現代農業園が作り上げられている。政府は現代農業園の開発に三農問題の解決や持続可能な農業の実現を託しているといっても過言ではない。

2 「現代農業園」の「問題」とは何か——先行研究の検討と予備調査の結果から

2-1 先行研究の検討——都市型農業、特に「現代農業園」開発にかかわる諸問題の研究における問題の所在

1990 年代に入ってから、農業経済学という分野の多くの研究者は中国の「都市型農業」を対象とした研究をはじめた。彼らは現代農業園や技術農業園を研究対象に、農業園の経営コスト、生産効率及び農業の持続性を数値的に分析し、農業園の環境持続性と経済性を証明した。これらの研究結果は世に大きな影響を与え、農業園の環境持続性と経済性はどこでも高く評価されている。

ところが、最近、現代農業園の開発による悪影響や社会問題も明らかになり、現代農業園は三農問題を救う万能薬ではないことも分かってきた。

まず、土地利用の問題が一番多く取り上げられている。農業園開発のために、事前に大量な農地が収用されるが、開発の進捗が遅いため、一部の土地は何年もの間、放置されることが多い。加えて、開発された地域の農業園の経営状態により、放置された土地の開発の可否が決められることも多いため、経営を維持できない場合、放置された土地は他の形式で開発されてしまうこともある。さらに深刻な問題は、不動産会社が農業園開発の名目を借りて、農業園の中で大規模なビルや商用施設を建て、土地を不法転用することも珍しくないという。現代農業園は農産物のひとつだというもの、土地の使用や管理に対する法規制がまだ不十分であるため、結局一部の人たちの儲け道具となってしまうおそれがある。（朱明德、2003 年）

第二に、開発にかかわる農民たちの権益問題である。「農民の移住先が確保されない」、「回収農地の補償金が低い」、「農民の再就職が困難」といった問題が多く議論されている。（潘其雲、2005 年）特に、現代農業園の開発は工業園開発など他の開発より、未熟であるため、往々にしてかなり長期的な計画が立たれる。農業園に関する今後の収益額もや

⁴ 中国の行政区画：省レベルの行政単位が 34 個（内訳：省 23、自治区 5、直轄市 4 と特別行政区 2）、地区レベルの行政単位が 333 個で、県レベルの行政単位が 2862 個である。

や低く算出されるため、移住する農民たちに支払われる補償金の予算金額も抑えられている。補償金は一時金と毎月の分割払いのふたつの形式がある。一時金を選択すると、賢明な使い方をしないと、長く持たない。分割払いだと、毎月かなり少ない金額で、生活もできない。どんな選択をしても、再就職を考えなければならないのは現実である。ところが、農業一筋にやってきた農民たちにとって、農業で身につけた知識や経験を活かせる仕事を探すことは容易ではない。工場や企業側にとって、中年の現地住民を雇うより、出稼ぎの若者のほうが仕事に早く慣れ、賃金も安い。現代農業園の開発だけではなく、住宅開発、工業開発の際にも同じような問題が頻繁に発生している。

2-2 「現代農業園」に関する予備調査研究——「上海市金山区現代農業園区」を事例として

2-2-1 「上海市金山区現代農業園区」の現状の概要と特徴

2-2-1-1 調査手法

本研究の事例研究は、環境社会学の調査方法を用い、問題解決の方法を探究していきたい。環境社会学は、自然的環境と人間社会の相互関係を、その社会的側面に注目し、実証的かつ理論的研究する社会学分野である。実証研究では、データ収集、アンケート分析、調査票調査、インタビューや聞き取り調査を含むフィールドワークなどの方法が挙げられる。(飯島、2001年)

現代農業園開発がおこなわれた地域の現状を把握するため、上海市金山区にある現代農業園開発地域を対象に、予備調査をおこなった。調査手順としては、まず現地に入り、現代農業園開発に関する情報（開発の経緯、現状、移住された農民たちの情報など）を入手した。その後、移住された農民たちの場所へ行き、聞き取り調査をおこなった。

2-2-1-2 調査結果

上海市金山区（図1）現代農業園区はLX鎮に位置し、総面積は51km²で、2000年にオープンした。「果物園区」、「有機野菜栽培園区」、「花卉園区」、「牧畜区」、「水稻区」、「農産品加工区」の六つの部分から成っている。この地域に居住していた農民は分けられて、



別の場所に移住させられた。その中の一部の農民は金山区 LX 鎮「WCY 住宅区」に移住されたという情報を聞いた。移住させられた農民たちの生活現状を把握するため、「WCY 住宅区」へ行った。

調査の結果、「WCY 住宅区」に住んでいる農民は 3 つの村から移住してきたことが分かった。ひとつの村は植林のプロジェクトで、別の村は道路建設で、もうひとつの村は現代農業園の「農産品加工区」の開発によって農民は移住することになった。開発の種類が違うため、補償制度も大きく異なっている。また、年齢や所有した農地の面積などによって、得られる補償金の金額もさまざまである。「WCY 住宅区」で 5 人を対象に現在の生活について聞き取り調査をおこなった。ある老人（男性、70 代）は移住後の生活について次のように語ってくれた。

「住環境は大分改善されたけど、生活は昔よりも困難になった。補償金は多くても月 507 元（約 7500 円）で、少ない人は月 100 元の補償金しかもらっていない。物価は高くなる一方で、肉類も買えない。昔、自分で野菜を植えたり、鶏や豚を飼ったりしていたので、自分で食べるには十分だった。しかし、今は何でもお金で買わなければならない。子供と一緒に住んでいるちょっと年を取った人は家計に何にも貢献できなくて、子供たちの負担になって、家での立場もなくなっている。地下の車庫に住んでいる老人がいっぱいいるよ。農民は国に振れまわされて、本当に苦しいよ。」

聞き取り調査をおこなっている際に、集まってきた他の人たちも同様の意見を述べた。経済状況から考えると、移住後の補償金生活は必ずしも良好なものともいえない。

写真 1 は「WCY 住宅区」の裏手にある荒地であるが、規則なくさまざまな野菜を植えている。作業中の老人（女性、60 代）に話を聞いた。



「これは純粋に自主的にやっている農業だ。私たちの農地ではない。最初は何も植えていなかったけど、ある日、野菜を植えている人を見かけて、どうせ荒れているのなら、少しでも野菜を植えようと思った。それに、だんだん野菜を植える人が増えてきた。農地の大きさは自分で判断して、開墾する。あまりたくさん植えると、良くないので、皆 2m²ぐらいの大きさを目安にやっている。」

2m²の農地で野菜作りは種類も限られるし、収穫できる量も少ない。その小さい面積の農地で農民たちが得ようとしているものは単に野菜だけであろうか。

開発における土地利用や農民の権益の問題はよく議論されているが、開発において、こ

これは本質的な問題であるのか。移住先を提供して、補償金を多く支払い、就職のサポートもすればいいという問題であろうか。開発によって、農民たちは今まで長くかかわってきた生活環境を失い、生業をあきらめなければならない。しかし、調査では、マンションに移住された農民は、自分の土地ではなくても、農地が小さくても、丁寧に開墾して農業をおこなっている。農業という生業を営んできた彼らにとって、生業は単なる金稼ぎのためではなく、精神的な部分にも関わっているのではないだろうか。

農村への愛着、農業の大切さ、コミュニティの人々との絆など精神的な部分は数値で表示されにくい。中国国内の研究ではあまり具体的に議論されていないが、本当にそれでいいのだろうか。我々人間は知力だけ発達しているのではなく、この自然界で一番感情が豊富な動物だといえる。確かに法律や社会ルールの前に、感情で物事を判断するは禁物であるが、ごく普通の人々のごく普通の生活の中には、感情や思い出、記憶などの精神環境はとても重要なものであることはいままでもない。開発問題は多くの人の生活にかかわる問題であり、算出できる経済的なもの、いわゆる社会的な側面と、数値化できない精神的な側面の両方を考慮しなければならない。

2-2-2 「上海市金山区現代農業園区」における観光開発の試みとその問題点

「都市型農業」の定義からみると、都市部住民に自然環境と触れ合う場所、また農業体験や農村観光のできる空間を提供するということも考慮されていたが、現状では、「都市型農業」の開発はほとんど「現代農業園」の開発に傾き、生活者を排除し、大規模な技術生産農園を作り上げるパターンが多い。都市部住民向けの観光や子供向けの環境教育の部分も農業園内の見学に限られ、まるで工場見学のようなものである。

一方、最近、農村の伝統や文化がだんだん注目されるようになり、現代農業園の開発でも、農村観光レジャーや農村生活体験などの試みがみられている。ここで、上海市金山区現代農業園区の観光事業を紹介したい。前も紹介したが、金山区現代農業園区は金山区のLX鎮に位置し、「果物園区」、「有機野菜栽培園区」、「花卉園区」、「牧畜区」、「水稻区」、「農産品加工区」の六つの生産加工部門から成っている。各部門では見学や観光の活動も展開しているが、LX鎮の「中華村」で展開している「農家楽」という観光事業は多くの人々に注目されている。

「農家楽」というのは農村で展開している都市部住民向けの観光事業である。観光客に地域の名産物を提供し、また自然とのふれあいの場、田園風景を楽しめる場所、ゆっくり休める空間を提供するのがその主要なメニューである。

2005年ごろ、金山区政府はある旅行会社と提携して、LX鎮の「中華村」で民宿の開発や農村の観光事業などを計画しはじめた。旅行会社は出資して、村の全ての家屋に統一なリニューアル工事をおこなっていた。家屋の外装は旅行会社のデザインに基づいてリフォームし、内装もホテルの部屋の標準を参考に改造した。農家の空き部屋は客室として登録

し、旅行会社の下で厳密に管理される。農家は自分で観光客を受け入れることができず、全ての観光客は旅行会社を経由して、好きなポジションの農家を選んで泊まる。農家は旅行会社から家賃の一部をもらい、農家の女性は客室の清掃などのバイトをして、賃金稼ぎもできる。民宿の農家から観光客に食事を提供することは禁じられている。食事できるところは旅行会社のレストランに限られている。レストランの料理人はほとんど地元の人であり、料理も地元の伝統料理から厳選された品物である。「わざわざ郷土料理を食べに来る人も大勢いる。それに、祝日や土日に、子供を連れて、郷土料理を食べさせ、農村生活を体験させる親も増えてきている。レストランの隣室では小型の博物館があり、紡織機や農具、伝統的な農民手芸品などが展示されており、無料で見学できる。『中華村の農家楽』のコンセプトは都市部住民向けの観光とレジャーだけではなく、都市部の子供たちの教育にも役立ちたい」と管理責任者のG氏がいった。

では、「中華村」の生活者たちはこういう形の開発をどうみているのであろうか。民宿経営の一人のおばあさんにインタビューした。

(2008年6月15日 おばあさん 56歳) (抜粋)

筆者：お宅の主な収入はどこからですか？

おばあさん：昔は農業だった。LX鎮の貧困は上海市の中で有名だったよ。農民たちの生活は本当に苦しかった。約15年前、金山区現代農業園開発の話ができて、皆期待していたけど、結局この村は開発されなかった。農地も全部回収され、補償金だけで生活していた。さいわい、何年前か前、旅行会社が突然来て、皆民宿やりませんかと提案した。最初は誰も信じなかったけど、旅行会社は本当にリフォームの資金を出してくれて、皆続々と受け入れて、工事をしはじめた。去年ようやく完成し、オープンした。私の家は、6個の空き部屋を登録した。そこから家賃をもらい、私も部屋の清掃で少し給料をもらえる。旦那は近くの現代農業園区でバイトしている。

筆者：昔と比べて、生活は改善されましたか？

おばあさん：ずいぶん改善されたよ。昔農業をしていた頃、何の収入もなかった。今はようやく希望がみえてきた。

筆者：おばあさんは今、農業をしていますか？

おばあさん：庭でほんの少しの野菜を植えている。あと、少し鶏を飼っている。

筆者：民宿のバイトをしていて、まだ農業をする時間がありますか？

おばあさん：野菜ぐらいは時間かからないよ。花を植える人もいるけど、もったいないね。民宿のバイトも毎日あるわけではなく、客が来ないと、収入もないよ。

筆者：子供づれの観光客は多いですか？

おばあさん：あるけど、あまり多くない。子供連れの人たちはほとんど日帰り旅行だよ。うちには来ない。

筆者：では、泊まる観光客の反応はどうですか？

おばあさん：私たちはあまり観光客とお話しない。観光客はうちで泊まるだけだから。ほとんどかかわらない。やはり日帰り旅行の人が多い。

筆者：宣伝のパンフレットで、さまざまな活動（果物狩り、伝統料理作り、農業体験など）の紹介をみたけど、それは誰のアイディアですか？

おばあさん：良く分からない。観光客向けの活動などは私たちとかかわっていない。全部会社のほうがやっていると思う。

……

確かに、「中華村の農家楽」という観光事業は現代農業園開発の新たな試みであり、人と自然をつなぐための重要な一歩だともいえる。また、今まで政策的にまったく考慮されてこなかった地域住民の精神的環境を改善するためにも重要な可能性のある施策であると言え、この点は大変評価すべき開発のあり方である。

しかし、開発の対象となった地域住民を対象とした聞き取り調査などから、生活者の視点から現状を分析すると、「中華村の農家楽」にもまだいくつかの大きな問題点があることが分かった。

旅行会社は中華村の全貌をリニューアルし、景観上、元々この地域ではなかった部分や要素を添加し、結局作り上げた村は地域の特徴や個性を失い、川、農地、農民がいる普通の農村となった。それに、農民たちは観光開発の事業に参加しているようにみえているが、その事業に主体的な形ではかかわっておらず、今まで地域に蓄積された伝統的な生活文化や農業と切り離された形で事業が展開されている。それゆえ、彼らは開発の主体ではなく、開発の対象のひとつの要素にすぎない。まるで農村風景の中の飾り物のようである。都市部から来た観光客、あるいは子供たちに対して、「中華村の農家楽」にあるのは郷土料理と農村風景だけであって、子供たちへの教育の効果はあまりにも微少であることにもかかわらず、「中華村」の生活者たちの精神的な豊かさもやはり得られていないのではないだろうか。

この「農家楽」のような農村観光や農家民宿などの活動は世界各地でさまざまな形でおこなわれている。通常は「グリーン・ツーリズム」と呼ばれている。中国と似たような農耕文化を持っている日本は、1992年からグリーン・ツーリズムの活動を導入し、まもなく、日本全土に広がった。グリーン・ツーリズムの活動はさまざまなパターンがあり、活動の推進・展開・管理及び活動内容も国や地域によって大きな違いがあるが、金山区現代農業園区の「中華村」と同様に、日本のグリーン・ツーリズムも農家民宿と農家料理を中心としている。また、グリーン・ツーリズム活動の展開によって、地域再生や活性化を実現した地域もあるが、失敗した例も多くみられている。（山崎、2004年）

この中で、長野県飯山市でおこなわれている民宿と体験活動を中心としたグリーン・ツーリズム活動は、よく成功例として取り上げられている。そこで、長野県飯山市のグリーン・ツーリズム活動の内容分析から、中国の都市型農業の開発のあり方を考えてみた。

3 日本におけるグリーン・ツーリズムの試みを鏡にして

3-1 グリーン・ツーリズムについて⁵

日本も長い農耕の歴史を持っており、人々は自然とかかわりながら、さまざまな知恵と経験を積み重ね、生活を営んできた。しかし、産業革命や高度経済成長期を経て、人々は近代的な生活を手に入れ、ますます自然から離れた。農村の過疎化、高齢化や農業の衰退、及び都市住民の自然への希求という背景の下で、1992年に、日本の農林水産省は「グリーン・ツーリズム」という言葉を提唱し、都市と農村の交流や農村の振興などを図ろうとした。現在、グリーン・ツーリズムの活動は日本全土に広がり、卓越した成果を上げた。

「グリーン・ツーリズム」というのは、緑の豊かな農山漁村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動である。簡単にいうと、農山漁村で楽しむ、ゆとりある休暇を過ごす。それに、農山漁村に住む人々と都市部の住民とのふれあい、つまり都市部と農山漁村との交流を促進する。ヨーロッパでは、農村に滞在し、バカンスを過ごすという余暇の過ごし方が普及している。イギリスではルーラル・ツーリズム、グリーン・ツーリズム、フランスではツーリズム・ベール（緑の旅）と呼ばれている。滞りの期間は、日帰りの場合から、長期的又は定期的・反復的な（宿泊・滞在を伴う）場合までさまざまである。

農林水産省はグリーン・ツーリズムを、農山漁村地域における滞在型の余暇活動として位置づけている。1994年、「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律（略称：農山漁村休暇法）」⁶が制定された。この法律は、農村滞在型余暇活動に資するための機能の整備を促進するための措置などを講ずるとともに、農林漁業体験民宿業について登録制度を実施することなどを通じてその健全な発達を図ることにより、主として都市の住民が余暇を利用して農山漁村に滞在しつつおこなう農林漁業の体験その他農林漁業に対する理解を深めるための活動の基盤整備を促進し、もってゆとりのある国民生活の確保と農山漁村地域の振興に寄与することを目的とする。また、この法律では、「滞在型余暇活動」の定義を次のように定めている。「農村滞在型余暇活動」とは、主として都市の住民が余暇を利用して農村に滞在しつつおこなう農作業の体験その他農業に対する理解を深めるための活動をいう。「山村・漁村滞在型余暇活動」とは、主として都市の住民が余暇を利用

⁵ 本節の内容は「(財) 法人都市農山漁村交流活性化機構 グリーン・ツーリズムのホームページ (<http://www.ohrai.jp/gt/>)」、「農林水産省農村振興局企画部農村政策課都市農業・地域交流室のホームページ (<http://www.maff.go.jp/nouson/chiiki/gt/1aboutkt.html>)」、「フリー百科事典ウィキペディア (<http://ja.wikipedia.org/>)」、「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律」に基づいて整理したものである。

⁶ 1994年6月29日法律第46号。最終改正：2005年7月26日法律87号。施行：2006年5月1日。

して山村又は漁村に滞在しつつおこなう森林施業又は漁ろう体験その他林業又は漁業に対する理解を深めるための活動をいう。

「農山漁村休暇法」では、都道府県は、良好な農村景観を形成している地域について、農村滞在型余暇活動のための機能の整備に関する基本方針を策定することが規定されている。各市町村は、都道府県基本方針に基づき、農村滞在型余暇活動の機能の整備に関する市町村計画を作成することができる。さらに、農村滞在型余暇活動機能整備地区内の土地所有者は、農用地など農業資源の保健機能の促進を図るための土地利用協定を締結し、市町村長の認定を受けることができる。

また、法律では、国及び地方公共団体による支援措置についても言及されている。①国及び地方公共団体は、市町村長の認定を受けた計画に従って農業者及び農業者団体が農作業体験施設などを整備するのに必要な資金の確保又は融通の斡旋に努力、②市町村計画の実施に必要な事業をおこなう者などに対する助言、指導その他の援助に努力、③農業生産基盤の整備などに当たっては、市町村計画の達成に資するよう配慮、である。

体験民宿（農林漁業体験民宿）には、個人の営む小さな民宿から公設の大きな施設まで、さまざまな規模のものが含まれるが、グリーン・ツーリズムの推進にとって欠かせないものとなっている。「農山漁村休暇法」では、このような農林漁業体験民宿業の推進を図るための登録制度を設けており、ホームページやガイドブック⁷などを通じてPRをおこなっている。

体験民宿は、いわばグリーン・ツーリズムの拠点であり、利用者にとって第二の故郷だといわれている。体験民宿で用意されている体験メニューにはさまざまなものがあり、利用者はそれぞれが希望する体験メニューを選んでから、宿泊場所を決めていく。体験民宿では、自分の畑や目の前の海や山で採れたばかりの新鮮な素材を活用して、特産品・加工品を宿泊者に直接販売したり、自慢の郷土料理を夕食として提供するなどしている。これは農山漁村にとっては地域の活性化にもつながっている。農山漁村は、生活の場であると同時に、訪れる者にとっては楽しい余暇空間でもある。

財団法人都市農山漁村交流活性化機構のグリーン・ツーリズムのホームページのデータベースによると、日本全国で登録している農産物直売所は1659軒、農家レストランは1314軒、農林漁業体験民宿は559軒ある。（2008年7月時点）ほぼ日本全国の都道府県の市町村に広がっている。

⁷（財）都市農山漁村交流活性化機構が編集した本である。

3-2 日本長野県飯山市の活動を参考に

3-2-1 なぜ飯山市なのか

日本のグリーン・ツーリズムは行政主導と民間主導のふたつの流れがある。(山崎、2004年) 飯山市の活動では、行政の力より、民間の力を重視していたのである。行政は発起人となって、ハード面の整備を支援した上で、地域の住民を積極的に取り入れて、さまざまな議論の場を提供し、住民たちの意見を集め、住民と共に活動を進めていた。その結果、飯山市の自然や文化、住民たちの伝統的な生活、自然とのかかわりを活かしたさまざまな体験メニューを生み出した。

飯山市の「グリーン・ツーリズム事業概要」のデータによると、1993年、スキー客を中心に、飯山市の観光入り込み客は186万人に達したが、1998年には127万人に減少した。1994年、飯山市はグリーン・ツーリズム活動をスタートし、少しずつ観光客を取り戻しはじめ、1999年の観光客総数は約19万であった。スキー客の落ち込み、高齢化・過疎化などの問題に悩まされていた飯山市には、グリーン・ツーリズム活動の展開によって、多くの観光客が訪れるようになった。その結果、地域の活性化が実現した。活動を通して、地域の人々の間、そして地域の人々と外から来た人々との間でつながりが生まれ、副収入が増えた上、精神的な豊かさも得られた。これは金山現代農業園区でおこなわれた「中華村の農家楽」という活動では、みられなかったことである。

中国の現代農業園の観光活動において、参考になる要素を探るため、もっと詳しく、飯山市のグリーン・ツーリズム活動について考察してみたい。

3-2-2 日本長野県飯山市の概要⁸

飯山は、古くから山国信州と日本海を結ぶ交通の要所として栄え、塩、魚などの海産物の集散地、また大和朝廷時代の越後・出羽開拓における重要な駅路としての役割を担ってきた。戦後の昭和29年町村合併促進法の施行により、飯山町・秋津村・柳原村・外様村・常盤村・瑞穂村・木島村の1町6村が合併して飯山市が誕生した。昭和31年、太田村・岡山村を編入し、現在に至っている。

明治26年、飯山を経由しない信越線の開通により、徐々にその物流拠点としての機能を失い、その後は農業を中心として、飯山仏壇、内山紙などの伝統工芸をはじめとする地場産業が発展した。しかしながら、昭和30年代後半からの高度経済成長期において、産業の立地する条件を持たなかったこと、さらに日本でも有数の豪雪地帯であるというハンディ

⁸ 本節の内容は「長野県飯山市：<http://www.city.iiyama.nagano.jp/index.asp>」に基づいて整理したものである。

もあって、経済成長が停滞し、若年層を中心とした人口の流出が発生した。

農業は飯山市の基幹産業であり、全世帯数に対する農業率は 30%、この内専業農家が約 18%、第一種兼業農家が約 17%と専業・第一種兼業農家の比率が比較的高い地域であるが、高齢化と農家人口の減少が顕著である。この地域は豪雪地帯であるため、冬期は営農が不可能になる。昔は多くの農家が出稼ぎに出ていたが、昭和 30 年代前半、その対策としてキノコ栽培事業が取り入れられた。

飯山市の農家民宿は、キノコ栽培と同様に、冬期間の副業として、民間のスキー場開発とともに、昭和 30 年代前、全国に先駆けて始められた。現在では戸狩、信濃平スキー場と合わせて約 170 軒になるまで成長した。飯山市の観光入り込み客は、1993 年にピークに達したが、その後、落ち込みが続いた。

3-2-3 飯山市におけるグリーン・ツーリズムの経緯と概要

飯山市の農家民宿は、スキー客の落ち込みとともに、高齢化と後継者不足による過渡期に入り、農業の振興と地域の活性化が課題となった。1993 年度には日本国内で、全国に先駆けてグリーン・ツーリズム事業の指定を受けることができ、官民力を合わせて、取り組み始めた。ハード事業として、1994 年から 3 年間かけて、交流ターミナル（なべくら高原森の家、北滝湖の館、トピアホール）が完成し、都市と農村の交流の拠点として利用されている。

ここでは、「なべくら高原森の家（略称：森の家）」について紹介したい。森の家は飯山市の北部の岡山地区上段に位置する。この地域は冬期、通常 3 メートル、豪雪の年には 5 メートルを越す雪に覆われ、市内でも最も過疎化現象の激しい地区である。それも要因となり、この地域の自然景観は良好な状態で残されている。飯山市の当時の市長は「ブナ巨木の森で名高い鍋倉山の麓、きれいな水、豊富な動植物に恵まれたこの地を世に紹介したい。何とかしてこの過疎地を活性化させたいとの願いから、森の家を岡山地区上段の最も北に位置する柄山部落に建設すること」（小山、1998 年：6）と決心した。

1997 年にオープンしたこの施設は、6 ヘクタールの敷地に、ターミナルハウスを中心として、コテージが 10 棟、森の中に点在している。ターミナルハウスは大研修室も備え、飯山市のグリーン・ツーリズム情報発信基地としての役割を担っている。コテージには長期滞在ができるよう、自炊用の調理用品、食器なども備えられている。

森の家では、豊かな自然（ブナ林）の中でのトレッキング、植物・星空・ホタルの観察、そば打ち、紙すき、わら細工、山菜取り、炭焼き、農業体験など、さまざまな体験メニューを提供している。体験メニューの指導に当たって、県外から田舎好きのヤングスタッフ 5 人をインストラクターとして招き入れた。体験メニューは多種多様であり、専門分野の多くのインストラクターが必要になるため、市内外の多くの人々に呼びかけ、現在 100 人以上の登録者がいる。

森の家の活動以外、首都圏の小・中・高校の環境教育の一環とした自然体験教室、セカンドスクール、農作業体験などをメニューにした修学旅行の受け入れにも取り組んでいる。

3-2-4 飯山市におけるグリーン・ツーリズムにおける地域住民と農民の生活の質について——聞き取り調査から

飯山市のグリーン・ツーリズムの特徴は、四季折々の多彩な農村環境を演出する市全域を交流・体験のエリアとし、「標高差 1000m の自然・農林業体験」をテーマに取り組んでいる点である。市全域は「鍋倉山ブナ林の自然林エリア（自然体験・環境学習）」、「国営開発農地や農家民宿街の高原エリア（農林業体験・宿泊）」、「千曲川周辺や市街地の千曲川エリア（寺めぐり等の文化、歴史・カヌー）」という三つのエリアに分けられ、宿泊者は自由に選択できる。また、山間地では積雪を越す冬、雪解けとともに山々の緑が一斉に芽吹き、菜の花が咲き乱れる春から初夏、高原野菜を中心とした多彩な農産物の栽培・収穫の夏から秋と四季それぞれの魅力を楽しめる。

戸狩温泉スキー場の近くに民宿を経営している木原氏とグリーン・ツーリズムのインストラクターを勤めている奥さんにインタビューをおこなった。

（2008 年 1 月 29 日 木原夫婦）（抜粋）

筆者：グリーン・ツーリズム事業に参加するきっかけは何ですか？

木原さん：うちは昔から民宿経営をしていた。昭和 30 年代のスキーブームからね。しばらくは儲かっていたけど、スキー客の減少で、民宿の経営状況も大分悪化した。約 14 年前に、飯山市のグリーン・ツーリズム事業が始まって、市役所やインストラクターの話を聞いて、これはうちの民宿経営にとっても転機だと思って、協力しようと決心した。

筆者：この周辺、民宿が多いですね。

木原さん：確かに民宿が多いね。ほとんどのうちは民宿になっている。こういう事業（グリーン・ツーリズム事業）は一人でできない。やはり地域の皆の力を合わせて成り立つ。

筆者：グリーン・ツーリズム事業が始まって、もう 10 年以上になるとと思いますが、この事業の成果や効果、あるいは感じた変化とかありますか？

木原さん：昔は冬期に、スキーに来る人だけだったが、今は一年中、さまざまな目的を持って来るお客が増えている。例えば、田舎の生活を体験したいという人がかなり増えている。私たちも民宿経営だけではなく、さまざまな人と出会い、コミュニケーションでき、生活が楽しくなった。昔、雪が厄介だと思っていた。生活はとても不便になるし、農業にも大きな影響を与える。しかし、遊びに来る人たちはこういう真っ白の景観をみると、皆感動する。次第に、私たちも雪の美しさに気づき、地域のこういういいところを大事にして、より多くの人々にみてもらいたいと考えるようになった。

筆者：グリーン・ツーリズムの中で、さまざまな体験活動ができると聞きましたが、こう

いう体験のメニューは誰のアイディアですか？

木原さん：体験活動のことは奥さんに聞いたほうがいい。彼女は今グリーン・ツーリズムのインストラクターをやっている。

奥さん：最初は森の家のインストラクターたちがいろいろな活動を考えて、地元の人たちに協力を求めて、一緒に活動していた。次第に、地元の人たちも自分でいろいろなアイディアを出し始めて、もはや誰のアイディアではなくて、皆のアイディアだよ。

筆者：奥さんはどんな活動をしていますか？

奥さん：私は何人かの友たちと一緒に、郷土料理を教えている。地域の食文化をより多くの人に伝承してもらいたい。子供だけではなく、子供と一緒に来る奥様たちにも教えて、家に帰っても、子供たちに健康な食生活を与えてほしい。

筆者：では、グリーン・ツーリズムの活動を通して、ご自分自身は何か得たものがありますか？

奥さん：ええと、若くなった感じだね（笑）。知っていると思うが、飯山では年寄りばかりだよ。年寄りと年寄りが一緒にいると、さらに年を取った感じ。若い人たちと一緒にいると、自分も若くなった気分。それに、来る人はみんな我が子みたいなので、生活も寂しくない。毎日楽しいよ。

また、グリーン・ツーリズムの活動で、自分の農地を農業体験の場所として提供し、観光客に農業を教える専業農家も多くいる。「なべくら高原ひぐらし農場」を経営している専業農家の木内氏にインタビューをおこなった。

筆者：木内さんはどうして一生懸命農業をしていますか？

木内さん：まあ、もともと農家に生まれて、自然にね。それに、やっぱり（農業が）おもしろい。お金だけではないおもしろさがある。とても大変だけだね。

筆者：農作業が大変ということですか？

木内さん：それもあるし、もっとも大変なのは異常気象だね。特に飯山では、大雨や大雪が多いから、いつも心配している。

筆者：そうですね。気を使って育ったものが何かあったら、悲しいですね。

木内さん：だから、物を育つことはとてもすばらしいことで、皆に教えてあげたい。私にとって、農業がいきがいのから。

筆者：グリーン・ツーリズムとかかわりはじめたきっかけは何ですか？

木内さん：やっぱり周りの農家がだんだん高齢化してきて、跡継がなくて、たくさんの人が農業をあきらめた。地域も元気がなくなってきた、何とかしたいと思って、ちょうど市がグリーン・ツーリズムを始めるといったので、参加した。

筆者：具体的には、どんな活動をしていますか？

木内さん：うちは農場やっているので、観光客がとなりの民宿に泊まって、昼間は農場で

農業体験をしたり、遊んだり（している）。子供たちに野菜の育ち方などを教えたり、農作業の体験をさせたり、少しでも農業や自然に対する認識を深めてくれればと思っています。

筆者：では、観光客や子供たちの活動に対する反応はどうですか？

木内さん：家に帰ったら、親にずいぶん成長したといわれた子が多い。

筆者：グリーン・ツーリズムとかかわることによって、どんなものが得られたのですか？

木内さん：先にいったように、地域活性化に貢献できて、農業も継続できて、とてもいきがいを感じる。

木内氏にとって、農業は仕事であり、いきがいでもある。大変なこともあるけれども、やめられない。農業自体も重要な存在であり、その重要性を人に伝えるのも重要だと木内さんは考えている。飯山では、木原夫婦や木内氏のように、グリーン・ツーリズムの活動の中で活躍している地元の人は多くいる。彼らは農業や農村生活で積み重ねてきた生活の知恵や経験を活かして、都市部の人や子供たちに教え、地域の美しさ、文化、歴史などをより多くの人々に伝えるために努力している。彼らの活動は地域の活性化を導いている。また、活動を通して、彼ら自身もやりがいを見つけ、精神的な豊かさを感じるようになっているのではないだろうか。

3-3 地域住民の生活の質を高めるグリーン・ツーリズムのあり方を問う

飯山市の事例から、日本のグリーン・ツーリズムの活動の優れた点を三つの側面からまとめてみたい。

まず、政府機関がグリーン・ツーリズムの活動の発展に大きく寄与した。政策面では、「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律」を制定した上で、グリーン・ツーリズムに関するさまざまな規制緩和を打ち出した。例えば、農林漁家が民宿をおこなう場合の旅館業法上の面積要件の撤廃が2003年に全国で展開された。以前は簡易宿所の民宿を開業する場合、33㎡以上の客室面積が必要であったが、規制緩和後、33㎡に満たない客室面積であっても、簡易宿所営業の許可を得ることが可能になった。また、政府は都市と農村の交流の拠点となる施設建設などのハード面も支援している。飯山市の事例では、総合交流ターミナル「なべくら高原森の家」の総事業費4.6億円の内、50%は政府からの補助金であった。それに、グリーン・ツーリズムの活動を推進するため、行政部門の中に、専門の部門を設置した地域も少なくない。飯山市は、グリーン・ツーリズム事業の推進組織として、「グリーン・ツーリズム推進協議会」を発足させ、市、農業協同組合連合会、観光協会及び民間の関連組織などと連携を取りながら、さまざまな交流事業の企画、宣伝、実施及び管理などを支援している。

第二に、インストラクターの協力もグリーン・ツーリズムの特徴の一つである。グリーン・ツーリズムの普及と定着を図るためには、地域を訪れる人たちが充実した余暇を安心

して過ごすことのできる受入体制の整備と、繰り返し訪れてみたいと思えるような魅力的な地域づくりを進めることが重要である。そしてこうした取り組みを支える人材の育成や確保が必要となる。地元の住民がインストラクターになって、さまざまな活動の指導をおこなうことも少なくないが、ここでは、地元ではない人間が地域に入り、住み込みで活動をおこなうインストラクターに注目したい。外部から入ってきたインストラクターの年齢層は比較的若年層の人が多いため、彼らの住み込み自体は地域に新鮮な風を吹き込むことになる。また、外部から来た彼らは地元の人たちと比べて、地域の美しさをより敏感に感じ取るため、彼らの目線から観光客に地域のすばらしさを紹介することも、さらに説得力があるのではないだろうか。

第三に、政府機関など外部からの支援のほか、地域住民の協力がグリーン・ツーリズム事業の成功につながる最大の要因ではないかと筆者は考えている。民宿経営であれ、体験活動の指導を務めることであれ、地域の活性化及び生計のためだという見方もあるが、観光者や体験者たちにとって、地元の人々から得たものの価値は金銭の価値以上ではないだろうか。また、活動に参加する住民たち自身にとっても、注目、尊敬、やりがいなど、金銭で評価できない精神上的の豊かさも得られたのではないだろうか。

ところが、グリーン・ツーリズム事業もいくつかの課題に直面している。

山崎氏は日本におけるグリーン・ツーリズム推進上の不足点を五つ挙げている。

「①なぜ農家がグリーン・ツーリズムに取り組む必要があるのか、についての推進哲学が曖昧であること。 ②農家民宿開業時における許可制度（法制度）が厳しいこと。 ③開業志向農家への補助金支給など直接支援がなされていないこと。 ④農家が民宿開業をする時に、施設規模や経営相談などができる相談窓口がないこと。 ⑤農家民宿などの存在を都市住民に常時伝える手段が開発されていないこと。」（山崎、2004年：24）

その内、①、②、⑤番の点はかなり改善された傾向がみられている。グリーン・ツーリズム事業が始まった初期段階時、推進哲学は確かにあまり明確ではなかった。しかし、最近になって、グリーン・ツーリズムを副業として、生活の確保及び地域社会に貢献すると同時に、都市と農村の交流を促進し、農家のいきがいを高めるという意識はだんだん定着してきたようである。②番目の法制度の整備について、上述したが、日本政府はさまざまな規制緩和によって、農家民宿や農家レストランなどの開業条件を緩やかにし、より多くの農家が参加できるように努力している。そして、⑤番目の宣伝問題については、インターネットの発達に従い、グリーン・ツーリズム活動の輪も徐々に広がっているのではないだろうか。

しかし、③番の補助金制度及び④番の相談窓口の欠如は今でも問題となっている。「日本では農家による民宿開業は一般旅館開業と同じ扱いとなって、公的な直接補助制度もないし、農家が民宿を始めたいと思ってもどこにも相談窓口がないのが現実です。」（山崎、2004年：28）

その他、グリーン・ツーリズムの活動の質を確保するのは今後の重要な課題だと筆者は

考えている。グリーン・ツーリズムは素朴な観光、継続的な交流を基本としている。リゾート観光や温泉観光などの豪華な観光とは異なり、一時的で派手な楽しみ方ではなく、穏やかな環境の中で、農業や自然と触れ合いながら、自然、伝統、文化などを学び、そして心に刻むのがグリーン・ツーリズムの理念である。「農山漁村の豪華なグリーン色のホテルに、大型観光バスで多数の観光客が訪れ、契約農家での農業体験や自然観察体験をおこない、グリーン色の包装紙に包まれたお土産を買って帰途に着く、という状況が生まれるとしたら、まさにそれは喜劇としかいいようがない。」（青木、2004年：40）

4 都市型農業における地域住民の生活の質の問題を問いなおす

4-1 グリーン・ツーリズムと都市型農業の背景の相違

中国の都市型農業の開発と日本のグリーン・ツーリズム事業はまったく違う背景を抱えている。中国の都市型農業の開発、あるいは現代農業園の開発は科学技術による効率的な農業産業化を図っている。農民たちは農地を失い、農業すらできなくなった。彼らの社会的環境と精神的環境は開発の中に、大きな影響を受けた。上海市金山区現代農業園にある「中華村の農家楽」のように、農業体験や農村観光など活動を試みている地域もみられているが、実際には、政府や民間企業が活動の主導権を持っており、農民たちは観光客や観光事業の活動などとのかわりが少ない。「中華村」の生活者たちにとって、副収入が増えているかもしれないが、精神的な豊かさはやはり得られていないのではないだろうか。

それに対して、日本のグリーン・ツーリズムは農村の高齢化・過疎化という背景の下で始まった活動である。グリーン・ツーリズムは農家の副業として、生活の確保及び地域社会に貢献している。それと同時に、都市と農村の交流を促進し、農家のいきがいを高めることが図られている。長野県飯山市の事例から、農家たちはグリーン・ツーリズムの活動を通して、得た収入以上の精神的な豊かさを得ているのではないだろうか。

4-2 都市型農業におけるグリーン・ツーリズムの可能性

中国の都市型農業の定義における観光レジャー及び体験活動の考え、あるいは「中華村の農家楽」の事例からみると、中国の都市型農業と日本のグリーン・ツーリズムは観光レジャー及び体験活動の部分に関する理念において、基本的に同じようなコンセプトを持っている。しかし、活動展開方法の違いから、得られた効果に大きな違いが生じたのである。

中国での農村観光事業、農業体験活動はまだ初期段階にあるとはいえ、最初から政府や大手企業が主導を握ることによって、農民たちはいつまでも発言権を持たず、積極的に参加する意欲も示しにくい。行政や企業主導の方法で事業が成功したとしたら、農民たちの

存在はますます軽視されるのであろう。逆に、行政や企業主導で成功できなかったら、「政府や大企業も成功できなかったから、農民の私たちにはもっと無理だ」と農民たちは思ってしまうのであろう。

日本におけるグリーン・ツーリズム事業においては、その事業を展開している地域の中に、飯山市と違って、行政が活動を主導している地域もある。しかし、誰が主導するにせよ、活動の中で観光客とかかわるのは農家であり、農家が主役となっている。それと比べて、中国の場合は、金山区の「中華村の農家楽」の事例でもあったように、行政や企業はあまりにもハード面にこだわりすぎるおそれがある。村にある全ての家屋や道路を一斉に一新したため、確かに衛生的であり清潔感はある。しかし、どこに行っても同じような建物で、地域の特徴や特別な魅力感じられにくいのであろう。それによって、地域ならではの伝統・文化・民俗、及び村の最も重要な要素——村の生活者と彼らの生活様式も重視されず、彼らにとっての真の豊かさも得られないのではないだろうか。

中国の都市型農業は、グリーン・ツーリズムと同様の活動を展開する可能性を十分有しているが、政府と企業が主導するのではなく、民間の力を合わせて、協力し合うことが重要であろう。

4-3 都市型農業におけるグリーン・ツーリズムの課題

では、中国都市型農業におけるグリーン・ツーリズムの展開が、どのような課題に直面しているかについて考察してみたい。

まず、中国の現存の法律では、日本のように、グリーン・ツーリズム活動を推進するための「農山漁村休暇法」はまだ存在していない。始めから関連法規を作ることも可能ではないが、現存の都市型農業の開発の関連法規を基礎に、観光や体験活動に関する内容を加えるということも考えられるのではないだろうか。

そして、農民たちの活動参加（家屋の修繕、インフラの整備など）に必要な資金に関して、全て政府が負担することも、農民たちが負担することもほぼ不可能に近い。考えられる方法としては、旅行会社などの企業を誘致し、政府・企業・農民三者が共に資金を集めることである。農民たちにとって、かなりの大金なので、無理ではないのかという意見もあるかもしれない。しかし、今までの都市型農業の開発の事例をみると、現代農業園の開発のために村の農地はほぼ全て回収され、農民たちに相応の補償金が支給されている。その補償金を投資することができるのではないだろうか。

また、活動を展開するための農地の確保も重要である。今までの都市型農業の開発は自留地を含む全ての農地を回収するパターンが多かった。「中華村の農家楽」の事例でも、観光事業に参加している農民たちは農地を持っていない。庭や家の周りのわずかな土地を利用して、野菜を植えている人もみられるが、体験活動にはふさわしくないのであろう。金山区の現代農業園の事例からも、飯山のグリーン・ツーリズムの事例からも、農業という

生業を営んできた人たちにとって、金稼ぎ以上の意味を持っていることが分かってきている。活動を展開するためには、農業がひとつのキーワードであり、人と人、人と自然をつなぐための媒介のひとつであると理解しても良いであろう。筆者の考えでは、自留地という制度を利用すれば、自給自足用と活動用の農地が確保できるのではないかと考える。家族の常駐人口、あるいは民宿を開業する場合に受容できる顧客の人数によって、農地を再分配する。大規模な農地は現代農業園に使い、零細農地は農民たちに分配する。すると農民たちはそこを体験活動にも活用することができるのであろう。

三つの課題は事業を始めるためのいくつかの必要な条件にすぎない。活動を継続的に展開していくのは活動の担い手の努力が必要である。地域の資源、伝統、文化に基づくこの活動は、地域のことをよく知っている生活者たちを除いては成り立たない。彼らは言葉で表現するのが苦手かもしれないが、地域の良さ、地域の伝統、文化、及び自然と付き合いながら積み重ねてきた経験や知恵は彼らにしか伝えられないのであろう。必要であれば、日本のグリーン・ツーリズムの活動のように、インストラクターの制度を導入するのもよいのであろう。

このような活動を通して、農民たちは一定の副収入を得ることができ、観光客が少ない時期であっても、自給自足の農地で生計を維持できる。最も重要なのは、農民たちが活動に参加することによって、人と人をつなぐ、あるいは人と社会をつなぐ関係性を見出すことができ、個々の精神的な豊かさを得られるのであろう。それによって、「都市型農業」も真の意味で、持続可能な農業となるのではないだろうか。

すでにできている現代農業園での課題を分析した上で、今後の開発において、前述した諸問題を回避することを可能するためには、農民たちの社会的環境と精神的環境を考慮に入れた開発のあり方を考えなおすべきである。そのため、本研究は現代農業園の開発がされる可能性のある地域として、上海市松江区（SongJiang）C鎮のCL村を対象に、農業を営む人々の自然とのかかわりの歴史及びその現状について調査をし、事例と結び付けて、都市型農業開発のあり方について再考察をおこなった。

5 都市型農業の開発において何が必要なのか——上海市松江区 C 鎮 CL 村における現地調査から考える

5-1 問題の所在と研究の手法

前述のとおり、農業を営む生活者の視点からみると、目下の中国における都市型農業の開発はさまざまな問題を抱えている。今までの現代農業園開発では、農民たちは長くかわってきた生活環境を失い、生業をあきらめなければならなかった。補償金がもらえとはいえ、金額が低く、再就職が困難などの問題が多発している。それだけではなく、金山

区現代農業園区の事例からみると、開発後の生活は彼らにとって、必ずしも豊かではなかった。とりわけ彼らの精神的環境は大きな変化を起こったことが明らかであった。金銭で評価できないこの部分は現代農業の開発では、まったく考慮されていない。

都市型農業の開発のあり方を探るために、まず農業を営む人々の自然とのかかわりを解明する必要がある。上海市金山区現代農業園区の事例と同様に、本事例も環境社会学の調査方法でおこなった。

現代農業園開発の可能性がある地域として、上海市松江区 C 鎮 CL 村を対象地に選定し、①現地調査による対象地の全体の把握、②調査票調査による量的な調査、③インタビューを中心とした質的な聞き取り調査、という順番で調査をおこなった。

5-2 上海市松江区 C 鎮 CL 村の概要

上海市は中国の代表的な大都市で、最初に都市型農業の政策を提出した。改革・開放政策が持ち出されて以来、上海市全体は急速に発展し、経済、金融、貿易を集約した国際的な大都市になっている。上海市は国家の政策や方針に対して反応や行動が素早く、自らもさまざまな改革や変革を試みている。上海市の発展成果は中国の誇りであり、他の都市の模範でもある。上海市を対象とする研究の結果は、他の都市の発展の過程で発生した問題の解決、あるいは発生しうろ問題の回避にはとても意味があるといえる。

松江区は上海の歴史文化の源とみられており、多くの遺跡や文化が残っている。昔から農業を主な産業としていた松江区はこの 10 年間で、驚くべき変貌を遂げた。きれいに整備されている工業園地域や高級住宅地、人と車で混雑している道路をみると、まるで大都市にいたのではないかと錯覚した。それに、松江区の南西部にある五庫農業園区は 11 km²の面積を占めており、農業、林業、畜業三つの地域が整理されていて、余計な建築物は一切みられず、壮麗な景観であった。一方、激しい開発の流れの中に、一見昔の農村のままに、まだ開発されていないところもたくさんあった。松江区の工業開発地域 C 鎮の南に位置する農業地域の中に、CL 村という村があり、「現代農業園開発の候補地になる可能性がある」という情報を耳にした。

5-3 調査地の歴史的な位置づけ及び現状⁹

調査対象地の位置する上海市の近郊農村の全体の歴史変遷と現状について概要を整理した。

1949 年 10 月 1 日に中華人民共和国は成立した。その後、真っ先に取りれた行動は封建

⁹ 「中国農業全書—上海巻」(沈鎮昭、2001 年、中国農業出版社)を参考に整理したものである。

制度の廃止と土地改革であった。上海市は 1950 年 12 月から、一年間をかけて、全ての農地を回収し、その内の 17.13 万ヘクタールの農地を農民に分配した。

1953 年 12 月、中国政府は「農業生産合作社の決議」を発表し、統一農耕、統一分配などを提唱し、零細農業から集団農業への転換を促した。1955 年末まで、上海市では約 96.6% の農家が「農業生産合作社」に加入した。この一年で、上海市の農業生産量は倍増した。

1959 年から 1960 年の間、「大躍進運動」¹⁰と「人民公社運動」¹¹の影響で、経済建設が加速化し、農業から工業へ大量の資金が移転され、農村は発展が大幅に遅れ、農民の生産意欲はくじかれていた。上海の農業生産も停滞状態であった。

1961 年から 1965 年まで、政府の調整政策により、崩壊した経済体制と農業生産は徐々に回復したが、1966 年に文化大革命¹²が起こり、中国は再び混乱に陥った。1976 年に、文化大革命が終わり、上海市の近郊農村はすばやく困難から立ち直り、農業生産に力を入れ、大きな成果がみられた。

1978 年の中国共産党第十一期三中総会に、鄧小平は改革・開放という政策を提出し、沿岸都市をはじめに、外国資本を積極的に導入し、経済体制の改革と開発の促進を図った。中国の計画経済体制が市場経済体制に変わり、農業の「家庭聯産承包責任制（家庭単位の農地請負い制度）」という制度が採用された。人民公社が解散され、農家は政府から農地を請負い、家庭単位で農業をおこない、農業から収入を得るようになった。1983 年 5 月まで、上海市では 95.4% の農村が聯産承包責任制を実施していた。

1988 年から、政府の「菜藍子工程（買い物かごプロジェクト）」に応じて、上海市は近郊農村での副農産品の生産に取り組みはじめた。しかし、1990 年代に入ると、都市開発のため、近郊農村の大量な土地が収用され、「菜藍子工程（買い物かごプロジェクト）」は次第に近郊農村から遠い郊外に移されはじめた。同時に、都市開発による都市の拡大で、近郊農村は開発の波に巻き込まれ、農地の減少や農業の衰退などさまざまな問題が発生した。市政府は農業の現状を改善するため、人材と技術を集め、農業を産業化・工業化させることを考えた。1994 年、上海市政府は「都市型農業」を正式に検討に入れた。これは「都市

¹⁰ 大躍進運動：1958 年、政府は「15 年でイギリスに追いつけ追い越せ」というスローガンを打ち出し、経済建設のスピードアップを図った。しかし、農村の現状を無視した強引な集団農場化や、農村での鉄鋼生産などを進めた結果、生産力は停滞し、食糧生産不足で数千万人が餓死するという悲劇が発生した。

¹¹ 人民公社運動：1958 年に大躍進運動の開始と共に、生産合作社を合併し、生産手段の公社所有制に基づく分配制度が実行されていた。人民公社と呼ばれる組織の中にいる全ての住民が共同生産、共同消費、共同教育、統一分配の生活をしていた。

¹² 文化大革命：1960 年代後半から 1970 年代前半まで続いた、封建的な文化、資本主義文化を批判し、新社会主義文化を創生しようという運動である。政治・社会・思想・文化の全般に渡る改革運動のはずであったが、実際には多くの資産家、学者ら知識人が迫害され、結果的に大量虐殺とそれに伴う内戦へと発展し、国内は長期間にわたる混乱に陥った。

農村一体化」の政策から農業を守る最善な方法だと考えられていた。国内外の資金と技術を吸収し、「種子（優良品種栽培）プロジェクト」、「温室（温室栽培）プロジェクト」、「生物（バイオテクノロジー）プロジェクト」と「緑色（安全野菜）プロジェクト」四つのプロジェクトを軸に、大規模な現代農業園の開発を展開した。2007 年まで、上海市では合計 12 箇所、ほぼ各区に一つ以上の現代農業園が造られた。敷地の総面積は約 350 km²で、総融資額は 85 億元以上に達した。しかし、工業や商業などの成長と比べると、農業の発展状況は依然楽観的なものではない。表 1 の上海市 GDP 構成推移のデータが示しているように、上海市全体の経済構造は第二次産業と第三次産業に傾き、特に第三次産業は都市部に集中しており、今後も拡大する傾向にある。

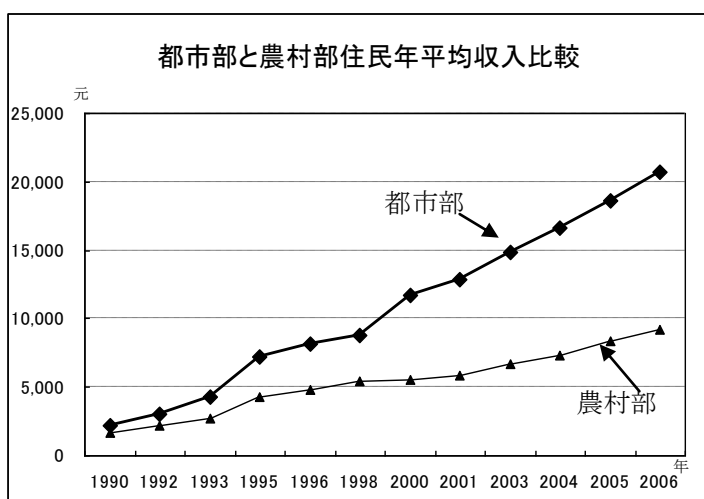
農業と工業を主な産業としている近郊農村は都市部の発展に伴い、さまざまな機会に恵まれ、多少発展しているが、図 2 の上海市都市部と農村部住民の年平均収入比較図をみると、農村部と都市部の経済格差は年々増大している。

表 1：上海市 GDP 構成推移（単位：％）

年代	第一次産業	第二次産業	第三次産業
1970	4.7%	77.1%	18.1%
1975	4.0%	77.2%	18.8%
1980	3.2%	75.7%	21.1%
1985	4.2%	69.8%	26.1%
1990	4.3%	63.8%	31.9%
1994	2.5%	58.0%	39.6%
2000	2.0%	47.4%	49.6%
2002	1.6%	48.4%	51.0%
2006	0.9%	48.5%	50.6%

※ 出所：上海市統計年鑑 2007

図 2：上海市都市部と農村部住民年平均収入比較



※ 出所：上海市統計年鑑 2000～2007

5-4 開発の先頭に立つ近郊地域——上海市松江区

松江区（図 3）は上海市街から西南へ約 40 キロに位置し、悠久なる歴史を持ち、上海の歴史文化の源ともいわれている。九峰一帯¹³では、6000 年前に、すでに農耕しながら生活していた痕跡が発見された。松江区は長江のデルタ地帯に位置し、河川が縦横に流れている。総面積は 604.95km²があり、水域面積は約 10%を占めている。地勢が低く、土壌が肥沃で、大自然にとりわけ恵まれている。祖先代々の働きに加え、松江地域の農業や漁業はとても盛んであった。

¹³ 九峰一帯：現在の松江区の西部にある九つの山の周辺地域を指す。

松江地域の旧称は「華亭県」で、江蘇省の所属であった。1914年に「松江県」と改称し、1958年11月に上海市に編入された。1998年2月、「松江県」は「松江区」となり、開発が急速に始まった。中国では、「県」から「区」に昇格することは、「都市農村一体化、農村都市化」への加速を意味している。（尹継佐、2007年）

石田浩は2003年6月に実施した松江区の農村調査に関する論文の中で、松江区の現状について記述していた。「松江区は上海市域の拡大とともに都市化と工業が急速に進展し、農業の存在意義は極めて小さくなった。……鎮政府や村民委員会は村民から土地所有権を譲り受け、農地を造成して工業開発区を設け、標準工場を建設して外資系企業の誘致を盛んにおこなっていた。……純農村地帯であった松江区には工場が立ち並び、農地が急減し、農民は農業生産を放棄し、農地には雑草が生い茂り開発を待つだけとなっている。」（石田、2005年）

表2にみられるように、1980年の第一次産業のGDP構成比は40.2%であったが、その後年々減少し、2004年には2.3%まで下がっていた。一方、工業や建築業を含む第二次産業は2004年の時点では、70.2%と高い割合を占めていた。また、年鑑統計のデータによると、1986年の松江区の耕地面積は総面積の約61%、367km²であったが、2006年になると、耕地面積はわずか170km²になり、20年の間に、半分以上の農耕地が消失した。

図3 上海市地図



※ 出所：著者作成

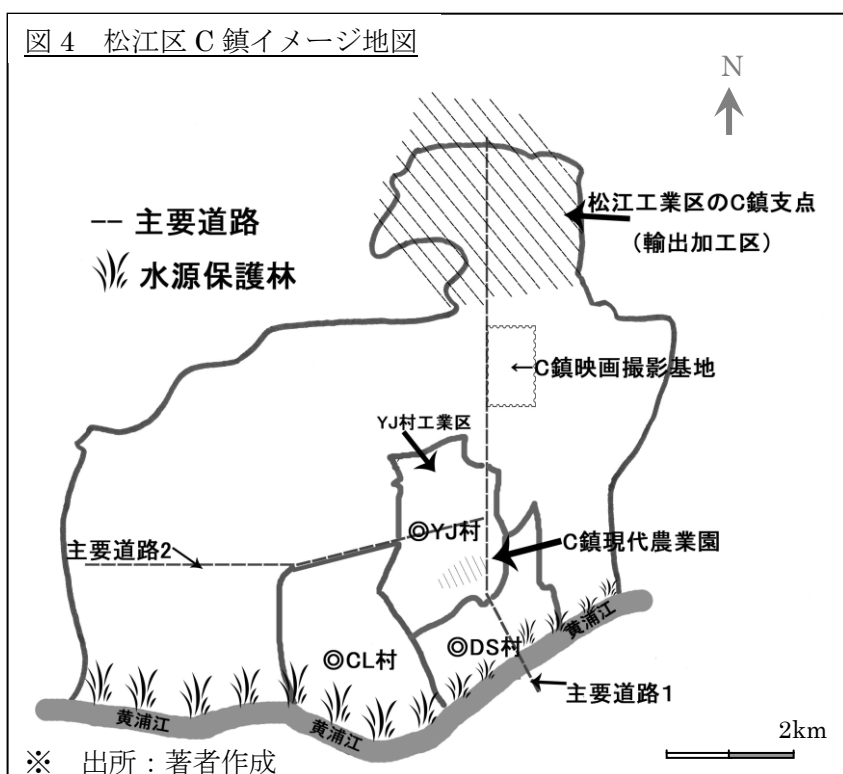
表2 松江区GDP構成比推移（単位：%）

年代	第一次産業	第二次産業	第三次産業
1980	40.2%	42.2%	17.6%
1985	27.5%	49.2%	23.2%
1990	23.9%	54.5%	21.6%
1994	17.9%	57.2%	25.0%
1996	12.8%	59.3%	27.9%
1997	9.4%	61.6%	29.0%
2000	6.7%	61.0%	32.3%
2002	4.8%	63.5%	31.7%
2003	3.3%	67.8%	28.9%
2004	2.3%	70.2%	27.5%

※ 出所：松江区年鑑 2005

5-4-1 上海市松江区 C 鎮の開発と CL 村

図 4 のイメージ地図を参考に、C 鎮の全貌を紹介しておきたい。C 鎮は松江区の東南部に位置し、南部は上海市の一番広い河かつ重要な水源——黄浦江に隣接している。昔から、黄浦江の豊富な水資源を利用して、農業と漁業が発展した。2000 年、C 鎮と隣の H 鎮は合併し、総面積が 49.98 km²になった。2004 年、C 鎮の北部にある 3 つの村の土地が「松江工業区」に分け与えられ、C 鎮の面積は現在の 45.3 km²となった。¹⁴



¹⁴ 上海市松江区 C 鎮政府 (<http://cdz.songjiang.gov.cn/default.aspx>) を参考に整理したものである。

「松江工業区」の建設に伴って、C 鎮の北部は「松江工業区の C 鎮支点（輸出加工区）」となり、面積は 10.8km²に達した。約 C 鎮の総面積の約 1/4 である。その他、YJ 村の北半分の地域も工業密集区として、有名である。上海市内からの交通が便利であるという有利な条件に加え、C 鎮は驚くべきスピードで開発を進めている。2004 年、C 鎮の工業生産額（表 3）は 1992 年の約 59 倍で、同年の農業生産額の 46.5 倍である。（何恵明、2005 年）工業開発はこれからも拡大すると考えられる。

表 3 松江区 C 鎮工業と農業の生産額（単位：万元）

年代	工業	農業	備考
1992	14090	5846	合併前の C 鎮と H 鎮の生産額の合計額
2004	822261	17682	

※ 出所：松江区年鑑 2005

C 鎮の開発におけるもう一つの象徴は「上海影視樂園」（映画撮影基地）であった。1998 年、「上海影視（集団）公司」は 15 億元の投資をし、C 鎮の東北部に総面積約 1 km²の撮影基地を作り上げた。基地内に、20 年代の上海の町並み、有名な遺跡、古代の宮殿などたくさんの景観が作られ、映画やドラマ撮影の重要なロケーションになっている。観光や旅行先としても大変人気がある。

工業区開発の程度と比べると、現代農業園の開発の規模はまだ小さい。C 鎮の東南部の YJ 村に位置する「C 鎮現代農業園区」の面積は約 0.43km²で、2003 年に運行しはじめた。農業園とはいえ、八割以上は花卉、盆栽、庭石など造園関係の企業である。¹⁵

C 鎮の北部は工業開発が進むにつれて、やや活気付けられているが、南部の地域は立ち遅れる感じがする。特に図 4 の中に表示している主要道路 2 の南側にある、黄浦江に隣接している村は一見、昔の農村のままである。黄浦江の岸に植えている水源保護林以外は、殆ど水田である。コンクリート三面張りの水路がたまにみられるが、殆どは昔の人たちが掘っていた土溝である。村の住宅は大体一箇所に集中しており、横に並んでいる家屋の前か後ろには必ず一本の川がある。昔この地域の人々に対して、川水は欠かせない存在だったことも容易に想像できる。天気の良い日に、四、五人の小さいグループが玄関前で日向ぼっこをしながら、おしゃべりしている光景はあちこちで良くみられる。

主要道路 2 の南側にある CL 村の総面積は 6.8km²で、耕地面積は約 2.9km²である。耕地のほか、水源保護のため、1.74km²の土地は生態林を植えられている。残りの土地はほとんど水田である。CL 村に登録している戸籍数は 3538 人で、世帯数は 944 世帯である。しかし、戸籍を農村に残したまま、出稼ぎに行った人が極めて多いため、実際に、村の人口は

¹⁵ 上海市松江区 C 鎮政府 (<http://cdz.songjiang.gov.cn/default.aspx>) を参考に整理したものである。

半分もないのではないかと村の委員会の幹部がいった。調査で見かけた人もほとんど中年の人であった。

5-4-2 現地調査の手法について

調査では、まず全体の概要をつかむため、農民たちの生活現状、愛着度及び開発に関する意識などについて調査票調査をおこなった。

調査票は全部で 17 問を設定しており、質問を十分に理解してもらうため、調査員が回答者に説明を加えながら質問し、回答は調査員が記入する方法でおこなった。調査は 5 日間をかけて、CL 村を約 1.5 km²の面積単位で五つのブロック（図 5）に分け、ブロックごとに回り、随意に出会った人々に調査票回答の協力を求めた。合計で 50 人を対象に調査をおこない、有効回答率は 90%であった。人数的には少ないが、質問に対する具体的な説明と関連のある内容の聞き取りも同時におこなったため、対象者の回答の精確さと信憑性は高いと考えられる。表 4 と表 5 は調査票調査の基本情報と質問表項目である。

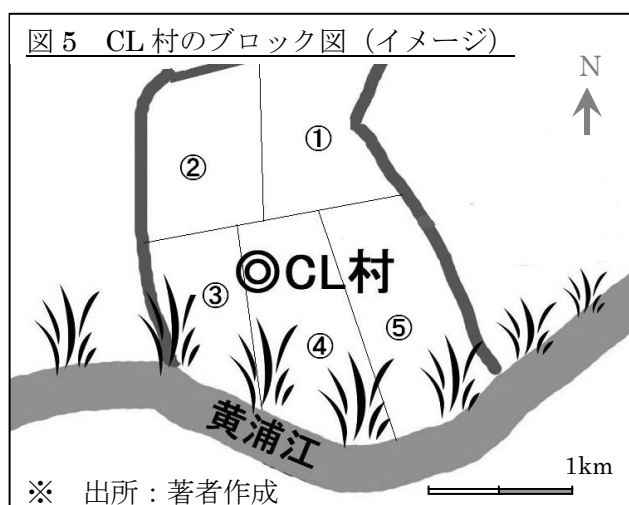


表 4 調査票調査の実施情報

日期（2008 年）	地域（C 鎮 CL 村）	調査員	対象者（男性）（女性）
2 月 10 日	第一ブロック	1 人	5 人 （2） （3）
2 月 12 日	第二ブロック	4 人	15 人 （8） （7）
2 月 14 日	第三ブロック	1 人	8 人 （4） （4）
2 月 18 日	第四ブロック	2 人	9 人 （3） （6）
2 月 21 日	第五ブロック	1 人	8 人 （4） （4）

※ 対象者の年齢範囲は 51 歳から 87 歳である。平均年齢は 64 歳である。

※ 対象者の居住年数の範囲は 31 から 81 年である。平均居住年数は 58.5 年である。

表 5 質問表項目

中国上海市松江区 C 鎮 CL 村における農民の生活現状、愛着度、及び開発意識に関する調査票	
①	お宅は現在、何人家族ですか？ A:1 人 B:2 人 C:2~5 人 D:5 人以上
②	子供はいらっしゃいますか？(B を選択した方は⑥へ進んでください。) A:はい B:いいえ
③	子供は何人いらっしゃいますか？(A を選択した方は) A:1 人 B:2 人 C:3 人 D:3 人以上
④	子供はどこに住んでいますか？ A:一緒に住んでいる。 B:同じ村に住んでいる。 C:もっと遠い地域に住んでいる。
⑤	子供は農地と農業を相続するつもりですか？ A:相続する。 B:相続しない。 C:まだ決めていない。
⑥	農地(自留地と請負う農地を含む)を持っていますか？農業をしていますか？(C を選択した方は⑨へ進んでください。) A:農地を持っています。農業もしています。 B:農地を持っているが、農業をしていない。 C:農地を持っていません。
⑦	どれぐらい面積の農地を持っていますか。(両方持っている方は AB 同時にお答えください)(1 ムー=666.67m ²) A:自留地 ※ I:0.5 ムー以下 II:0.5~1 ムー III:1 ムー以上 B:請負う農地 I:持っていない II:1~3 ムー III:3 ムー以上
⑧	現在、作付けをしている作物の種類を教えてください。(複数可) A:自留地 I:主食類(稲、麦) II:綿花 III:油菜 IV:旬の野菜 V:果物 VI:その他 B:請負う農地 I:主食類(稲、麦) II:綿花 III:油菜 IV:旬の野菜 V:果物 VI:その他
⑨	お宅はどこ産のお米を食用していますか？ A:自家産 B:村産 C:一般市場で購入したお米
⑩	お宅の主な収入はどこからですか？(複数可) A:自留地の農業 B:請負う農地の農業 C:農地を貸し出して、賃金稼ぎ D:工場などでのパート E:政府の補償金(農地賠償金) F:その他()
⑪	農閑期や休みの日にどんな娯楽活動をしていますか？(複数可) A:喫茶クラブ(マージャン) B:近隣訪問 C:ほとんど家にいる D:その他()
⑫	昔(若い時)はよく釣りに行きましたか？(魚獲りや貝類拾いなども含む) 最近はこの 10 年ぐらい？ A:昔はよく行きましたが、行かなくなりました。 B:昔も今もよく行っています。 C:昔も今も行っていない。 D:昔は行かなかったが、最近はよく行きます。
⑬	一番愛着を感じるもの、どうして愛着を感じるのかを選択してください。

に庭で日向ぼっこをしながら、おしゃべりをしている。二人とも自留地で自給自足の野菜を少し植えているが、毎日一時間ぐらいの農作業だけで、ほぼやることがないといっていた。Xさんは1985年まで、ずっと家で紡織をしていた。腕が良くて、村でとても有名であった。

現地調査を通して、農民たちの地域性に満ち溢れるさまざまな生活習慣を考察でき、その中に含まれている多彩な文化と知恵を評価しなおすべきだと深く感じた。インタビューや聞き取り調査の過程で、いろいろな人と出会い、たくさんの協力を得られ、彼らの素直な性格と友好的態度に感動した。それに、今まで教育レベルの低さで軽視されつづけてきた彼らの話をよく吟味すると、彼らの心の奥にある昔の思い、生活に対する不安、社会への期待なども強く感じる事ができた。

5-5 CL村における農民生活及び開発の現状

5-5-1 CL村における農民の生活の現状

2008年2月10日から2月21日の間、CL村の村民に対して、「生活現状、愛着度、及び開発意識に関する調査票」の調査を実施した。その結果（表7）に基づいて、CL村の農民の生活現状について分析をおこないたい。

対象者は任意選定で、異なる時間帯で異なる場所で出会った人に調査票の質問を答えてもらった。合計45人の対象者の内、男性21人（年齢範囲51～78歳）で、女性は24人（年齢範囲51～87歳）であった。ほとんどの家庭は、戸籍上4～5人家族であるが、実際に「一緒に、あるいは近くに住んでいる」のは25%未満であった。「子供は農地と農業を相続するつもりですか？」という質問に、100%の人が「いいえ」と答えていた。現在、上海市の労働雇用法律では、最低限の賃金は月750元（約11,250円）と規定されていて、上海市労働局の統計によると、2008年大卒の平均月給は2492元（約37,380円）である。学校から卒業して、ほとんどの子供は市内で就職することになる。CL村だけではなく、農業の跡継ぎがないのはどの近郊農村でも直面している厳しい現状だといえる。CL村の委員会の発表では、2006年度の村民の平均収入は6850元（約102,750円）であったが、聞き取り調査の結果、一世帯で一年に農業から得る収入は3000元前後である。「お宅の主な収入はどこからですか」という質問は、60%以上の人が農業の他、工場などでアルバイトをしていることが分かった。農民たちにとって、農業をするより、出稼ぎのほうがずっと楽に稼げる。

2年前、開発の話がいくつか出現し、村の委員会はそれを機に全ての請負農地を回収した。農民には、1ムー（666m²）¹⁶の農地に対して月250元の補助金を出している。回収した農地は村の管理の下で、時期に応じて人を雇って作付けをしている。5月下旬から11月末頃の間は稲作をし、その後、一部の農地は麦を植える。残りの農地はほとんど放置され、翌

¹⁶ 中国では、農地が「ムー」という単位で計算している。1ムー＝666m²

年また稲を植えることになる。村の委員会の管理だけでは行き届かないことが多く、虫害や農薬の不適切な使用などの問題がよく発生すると、聞き取り調査で明らかになった。

一方、農民たちは請負農地を失い、自留地の農業とわずかな補償金で生活をし、開発や今後の生活などについてはとても不安だと調査で分かった。CL村の場合、一人に約0.1ムー（66.6m²）の自留地が分配され、一世帯約0.3～0.5ムー（200～333m²）の面積である。面積が限られているため、自給自足の野菜ぐらいしか植えられない。主な食料は村から、あるいは一般の市場から購入している。基本的な生活は問題ないが、生活費以外はあまり余裕がないので、皆悲鳴を上げている。特に、農民は年金や医療保険制度が適用されていないため、老後の生活費と医療費は各自の家庭にとって非常に大きな負担である。調査票最後の問題は対象者たちに「政府に何かご要望がありますか」と尋ねた結果、90%以上の人は「現在の生活の経済状況を改善してほしい」、75%以上の人は「老後生活の保障、医療保険などの改善を考えてほしい」と答えた。

表7 調査表集計結果

中国上海市松江区C鎮CL村における農民の生活現状、愛着度、及び開発意識に関する調査票	
①	お宅は現在、何人家族ですか？ A:1人「0%」 B:2人「4.44%」 C:2～5人「86.66%」 D:5人以上「8.90%」
②	子供はいらっしゃいますか？（Bを選択した方は⑥へ進んでください。） A:はい「100%」 B:いいえ「0%」
③	子供は何人いらっしゃいますか？（Aを選択した方は） A:1人「22.22%」 B:2人「53.33%」 C:3人「20.%」 D:3人以上「4.44%」
④	子供はどこに住んでいますか？ A:一緒に住んでいる。「22.22%」 B:同じ村に住んでいる。「2.22%」 C:もっと遠い地域に住んでいる。「75.56%」
⑤	子供は農地と農業を相続するつもりですか？ A:相続する。「0%」 B:相続しない。「100%」 C:まだ決めていない。「0%」
⑥	農地（自留地と請負う農地を含む）を持っていますか？農業をしていますか？（Cを選択した方は⑨へ進んでください。） A:農地を持っています。農業もしています。「91.11%」 B:農地を持っているが、農業をしていない。「6.67%」 C:農地を持っていません。 「2.22%」
⑦	どれぐらい面積の農地を持っていますか。（両方持っている方はAB同時にお答えください）（1ムー＝666.67m ² ） A:自留地 ※ I:0.5ムー以下「70.45%」 II:0.5～1ムー「29.54%」 III:1ムー以上「0%」 B:請負う農地 I:持っていない「90.90%」 II:1～3ムー「6.82%」 III:3ムー以上「2.27%」
⑧	現在、作付けをしている作物の種類を教えてください。（複数可） A:自留地 I:主食類（稲、麦） II:綿花 III:油菜 IV:旬の野菜「100%」 V:果物 VI:その他 B:請負う農地 I:主食類（稲、麦）「一人」 II:綿花 III:油菜 IV:旬の野菜 V:果物 VI:その他「三人」
⑨	お宅はどこ産のお米を食用していますか？ A:自家産「22.22%」 B:村産「73.33%」 C:一般市場で購入したお米「24.44%」

⑩	<p>お宅の主な収入はどこからですか？(複数可)</p> <p>A: 自留地の農業「93.33%」 B: 請負う農地の農業「6.67%」 C: 農地を貸し出して、賃金稼ぎ「2.22%」 D: 工場などでのパート「62.22%」 E: 政府の補償金(農地賠償金)「35.56%」 F: その他「8.89%」(子供からの援助)</p>
⑪	<p>農閑期や休みの日にどんな娯楽活動をしていますか？(複数可)</p> <p>A: 喫茶クラブ(マージャン)「37.77%」 B: 近隣訪問「64.44%」 C: ほとんど家にいる「15.55%」 D: その他「4.44%」</p>
⑫	<p>昔(若い時)はよく釣りに行きましたか？(魚獲りや貝類拾いなども含む) 最近はこの10年ぐらい？</p> <p>A: 昔はよく行きましたが、行かなくなりました。「77.78%」 B: 昔も今もよく行っています。「0%」 C: 昔も今も行っていない。「22.22%」 D: 昔は行かなかったが、最近をよく行きます。「0%」</p>
⑬	<p>一番愛着を感じるもの、どうして愛着を感じるのかを選択してください。</p> <p>A: 自分の畑「31.11%」 I: 働いた場所だから「92.86%」 II: よく遊んでいた場所「7.14%」 III: その他「0%」 B: 川 「17.77%」 I: よく釣りや魚獲りをした「62.5%」 II: よく遊んでいた場所「25%」I II: その他「12.5%」 C: 生き物 「0%」 I: いろいろな生き物がいて、不思議に感じる II: 生き物を相手によく遊んでいた III: その他 D: 田園風景「28.88%」 I: 緑が豊かだから「46.15%」 II: 景色が綺麗だから「46.15%」 III: その他「7.70%」 E: その他 「6.66%」 理由(コミュニティや長く付き合ってきた近隣、友人など) F: なし 「15.55%」</p>
⑭	<p>開発することになったら、どんな開発を望みますか？(Fを選択した方は⑰へ進んでください)</p> <p>A: 工業「2.22%」 B: 住宅街「2.22%」 C: 現代農業園区「82.22%」 D: 観光地「0%」 E: どちらでもいい「11.11%」 F: 開発してほしくない 「2.22%」</p>
⑮	<p>開発に当たって、一番重視する要素を選択してください。</p> <p>A: 経済発展「93.33%」 B: 住みやすさ「4.44%」 C: 活気付け「0%」 D: その他「2.22%」</p>
⑯	<p>開発に当たって、一番残してほしいものは何ですか？</p> <p>A: 農地「17.77%」 B: 川「6.66%」 C: 家屋などの建物「13.33%」 D: コミュニティ「37.77%」 E: 田園風景「24.44%」</p>
⑰	<p>政府に対して、何かご要望がありますか？具体的に書いてください。(自由記入、複数可)</p> <p>① 現在の生活の経済面を改善してほしい。 「41 人」 ② 老後生活の保障、医療保険などの改善を考えてほしい。 「34 人」 ③ 開発の際に、農民たちの意見や考えをちゃんと聞いてほしい。 「27 人」 ④ 開発はともかく、先に農村の環境を改善してほしい。(川環境、農村衛生など) 「1 人」 ⑤ 交通不便の問題を取り組んでほしい。 「2 人」</p>

5-5-2 CL 村の開発を巡って

請負農地が回収された後、開発の話はなかなか進まなかった。その原因は当時の上海市政府の突然の人事異動に関係あるのではないかと考えている。その後、CL 村に隣接している YJ 村は企業の誘致に成功し、工場開発の計画を出していたが、結局市政府に却下された。詳しい理由は公表されなかったが、筆者の推測では、C 鎮の南部は黄浦江水源保護区の範囲内に位置しているため、工業開発は容易にできないからである。1985 年の上海市第八回人

民代表大会常務委員会第十四次会議で可決された「上海市黄浦江上流水源保護条例」の規定によると、黄浦江上流の岸に沿う 45 キロは水源保護区に適し、岸から 5 キロ以内の陸地は水源保護地域となる。保護区範囲内の企業に対して、排水標準値を規定し、黄浦江への排水を厳重に監視・管理をおこなうという内容も言及された。それに、1 キロ以内の地域では、汚染の恐れがある新規プロジェクトは一切認めないという内容も強調されていた。この法案に基づくと、C 鎮北部の工業区も水源保護区の 5 キロ以内に位置している。各企業の廃水排出は標準値に達しているかみしれず、工業区ではあまりにもたくさんの企業が集中しており、黄浦江や環境への負担や危害も心配せざるをえない。C 鎮における実質上の水源保護地域の面積は、岸から 2 キロぐらゐの範囲しか残っていない。

CL 村では、水源保護のため、2005 年まで、1.74 ㎩の農地を改造し、代わりに植林をしていた。政府から植林と維持・管理の諸費用をもらえるほか、村のインフラ建設用の補助金もある程度支給されている。しかし、現状では、開発された地域や都市部との経済格差が依然として縮まらない。そこで、生態保護を実現できる現代農業園の開発なら大丈夫ではないかと村の委員会は考えた。「現段階では、まだ政府とゐろゐろな問題について交渉中なため、具体的な計画内容は公開できないが、これからはこういう方向（農業園の開発）に向って頑張る。」と村委員会の幹部はゐった。

調査票の結果、約 98%の人は「開発を望む」と答えた。開発しないと、農民の生活は一層苦しくなると皆は分かっているのではないかと考えてゐる。しかし、開発に対して、農民の心境は複雑な感じでもある。調査中、以下の会話があった。

(2008 年 2 月 12 日 おばあさん 59 歳「水辺で販売用に田ニシ、マキガイを拾っている」)

筆者：C 鎮あちこち開発していますね。

おばあさん：そうですね。開発しても、農民は苦しいよ。農地があると、お金が無くても自分で食料を作って、何とか生きてゐけるけど、農地がないと、わずかの補助金では都市生活はできないよ。

筆者：工業開発についてはどう思ゐますか。

おばあさん：この何年間は景氣がいいから、いいけど、もし、ある日、外国人が一気に撤退すると、鉄筋コンクリートの工場は農地に返れないでしょ。庶民の私たちはもっと苦しくなるよ。周りの人たちは皆心配している。

筆者：現代農業園の開発はどうですか？

おばあさん：農地が守られるけど、農民は農業ができなくなる（移住のこと）のは工業開発と同じでしょう。

確かに、このおばあさんのゐったとおり、農民はお金がなくても、自然に少し手を加えれば、せめて食料は得られる。しかし、自然や農地がなくなったら、「ない袖は振れぬ」と同然であらう。

調査票の第14問「どんな開発を望みますか？」という質問では、80%以上の人が「現代農業園」を選んだ。「こんなに自然の豊かなところを工業区にしたら、なんだか心が痛む」と答えた人がいたが、「同じ条件であれば、工業開発より農業園開発の方がなんとなくいい」という考えを持って答えた人も多い。それに、「どんな開発をするのかは農民の私たちは決められることではないので、どちらでもいい」という気持ちを表した人もたくさんいた。調査票の最後に「政府に対して、何かご要望がありますか？」という自由記入の質問には、「開発の際に、農民たちの意見や考えをちゃんと聞いてほしい」と答えた人は多数いた。農民たちはいいたくないわけではなくて、いままで発言の機会が与えられなかったただけなのだと気づいた。それは、農民たちの社会的環境と精神的環境が軽視される問題と直接つながっているともいえる。

前にも述べたように、我々の周りに起きている環境問題は大体、人の生活と絡み合っている。環境問題を解決するには、人間の営みを考察することが重要なポイントである。特に、伝統的な社会に暮らす人たち、あるいは自然の中に生業を営む人たちの生活に浸透している文化や信仰、娯楽などの精神的な側面を分析し、人と自然、人と人のかかわりの全体性をつなぐものを見出すことが必要である。そのため、聞き取り調査や文献調査を通して、調査地 CL 村における、農村景観、主たる農業、副農業、自然にかかわる遊びなどの内容を整理し、調査地の農民たちは一体自然とどのようにかかわってきたのかについて、詳しく考察してみたい。

5-6 農民と自然とのかかわり（CL 村をモデルに）

5-6-1 農村景観

中国では、「自然」といったら、ほとんどの人は「農村」と結びつくのであろう。これは中国の歴史をみればよく理解できる。農業の時代が始まる前に、人々は主に狩猟と採集で食料を得、極めて不安定な生活をしていた。しかし、人口が増大し、より多くの食料が必要となり、自然の現存資源を頼るだけではますます生活が困難になった。これは農耕を開始させる契機となり、旱魃地域では畑作が始まり、水資源の豊富な地域では稲作が盛んになった。狩猟採集の集団や集落もある場所に定着し、人々は協力しあいながら、安定した生活を送ることができるようになった。人々は農業をはじめとするさまざまな働きかけをし、自然をある範囲内で改造し、ある意味の持続的な環境を作り上げた。これは農村の最初の形態であった。特に、中国の土地資源や気候などの条件は農業に大変適合しており、町や漁村より農村の人口が圧倒的に多く、いたるところに農業がみられるといえるぐらい広範囲でおこなわれている。農村では、家屋の以外のものはあまり装飾されていないため、自然の基本的な要素（水、土、太陽など）をそのまま感じるができる。めったにみる機会のない遠い原生自然より、身近な農村風景を自然とみなすことも理解できる。

ところが、自然風景と違って、農村の景観は人が自然に手を加えて造られた部分が多く、ところどころで人と自然の深いかかわりがみられる。

調査地の CL 村は黄浦江という水源に近いので、村の水資源は極めて豊富である。しかし、水に恵まれ、漁業と農業が盛んであった反面、川の氾濫などの水害も頻繁に発生し、人々を苦しめていた。1403 年から 1948 年の間に、松江地域では 134 回、約 4 年に一回の頻度で水害が発生していた。歴史上、農民たちは政府（官吏）と積極的に協力し、治水に取り組んでいたことが数多く記録されている。中国が建国してからも、政府は直ちに治水に大きな力を入れた。その結果、たくさんの川が開拓され、くぼんでいた地域も整備され、より農業に適合した環境を作り出した。1960 年代から、「農田格子化」（農地柁化）という計画が打ち出され、政府は農民たちを動員し、農閑期を利用して川や水路を作り、農地柁化を実現した。農地面積の計算や灌漑などをしやすくするため、農地は正方形や長方形に作られ、水路や川もほぼまっすぐであった（写真 2）。柁化された農地と直線の水路は CL 村の一番特徴的な風景である。また、灌漑のため、水路では水門（写真 3）が作られている。村の各生産隊¹⁷（50～100 人未満）には一人の放水員がいて、灌漑の機械を操作する。田畑の農作物の種類によって、灌漑するタイミングも違って来る。村は灌漑のスケジュールを決まって、生産隊のラジオで流す。農民たちは決めた時間に、各自の田畑にある水門を開ける。



¹⁷ 昔の村の行政組織の単位の一つである。生産隊は一番小さい単位である。

また、CL村の人々の生活にとって、農地だけではなく、川も重要な存在であった。写真4のように、ほとんどの場所では、農地よりも、川のほうが人々の生活圏の近くに位置している。1960年代までは、生活に必要な水は全て川から汲み取らなければならなかったため、村の先祖たちはきれいな広い川を選んで、比較的便利な生活を送っていた。それゆえ、生活圏付近の川は大体、昔からある古い川である。写真5のような、川につながる階段も農村でよくみられるものである。

写真4 川沿いで生活 (CL村)



写真5 川への階段 (CL村)



(2008年2月26日インタビュー Cさん)

「水を取るため、家から出る機会が多く、よく階段に立ったまま、近隣や道を通った人と挨拶をしていた。そのおかげで、村民の間にコミュニケーションも多かった。しかし、1960年以降、政府は衛生面を考え、井戸水を使うように呼びかけ、1992年から、水道水も通り、川の水は殆ど使わなくなった。つい最近まで(10年前)家の前の川はすごくきれいだった。井戸や水道水を使うようになってから、川水を飲まなくなったけど、洗濯や庭に野菜に水やりをするのに、よく川水を使っていた。だけど、隣の村(YJ村)で工業区ができて、出稼ぎの人たちがいっぱい入ってきて、彼らは生活廃棄物やゴミをそのまま川に投げ込むので、川はあつという間に汚くなってしまった。村委員会は定期的に人を雇って、川の清掃をするけど、人手不足で、あまり効果がない。今、この川は汚くて、この階段に立つ人も見かけなくなった。」

Cさんの話では、川を汚したのはよその者たちであるとされていた。けれども、実際にそう簡単に結論付けてはいけない。昔の村人にとって、川は命とかかわるものであって、とても大事な存在だったため、強制されなくても、人々は、無意識に、きれいに丁寧に川を使っていた。おそらく当時、誰かが川を汚すということは、人の宝物を壊すのと同様で、村の人々を敵にまわることになったのであろう。しかし、近代化に伴い、昔より川を頼らなくても困らなくなったため、川の多様な機能はほとんど不要になり、人々はまた無意識的に川の存在を軽視し、遠ざけてしまった。

同様に、農用水路も単に水を水田に送る道にすぎなくなった。崩れやすい土水路より、コンクリートの水路が効率よく水を送れる。維持管理も比較的に簡単であるため、最近、「コンクリート三面張り」(写真 6) の水路も増える傾向がある。

CL 村のような、水路の汚染、あるいは「コンクリート三面張り」への改造による景観の変貌は、現在の近郊農村では珍しくない光景である。昔の人々も便益を図るため、景観の改造などいろいろな工夫をしていたが、農業や水路とのかかわりはずっと深いままであった。ところが、現在の農村景観の変化は人と農業や水路の関係性が切れることを示している。それこそ農村環境の悪化の主因ではないのであろうか。しかし、昔のように、川水を使う生活に戻るようにとも勧めたいわけではない。まず、人と農業、川、農用水路などの関係性に注目し、その関係性を回復させることがポイントである。具体的に、どんな方法が考えられるのかは第 4 章で提示したい。

写真 6 コンクリート三面張り (CL 村)



5-6-2 生業と副業

最初は主に農業を中心に調査をおこなっていたが、調査を進めるうちに、農民たちは実際に多様な形式で生活を営んでいることが分かり、農業以外にも、農民たちはさまざまなところで自然とかかわっている。本節は主たる農業と副業、二つの面から農民の営みを分析し、農民と自然との深いかかわりを解明したい。

5-6-2-1 主たる農業

1978 年前、政府の政策に従って、CL 村は「双季稲・三熟制 (二期作・三毛作)」の原則で農業をおこなっていた。稲作は秋と夏の二つの時期に分けておこない、苗代田以外の耕地は麦 (11 月から 6 月) 一稲 (6 月から 8 月) 一稲 (8 月から 11 月)、あるいは油菜一稲一稲の順番で三毛作をしていた。

(2008 年 2 月 25 日インタビュー S さん)

「食料の総生産量は大幅に増えていたが、半分以上は「早粳米」だった。「早粳米」は夏に収穫する米で、品質が悪く、とてもおいしくなかった。それに、夏に第一期の水稻を収穫し終わって、すぐ二期目の水稻を植える作業をしなければならなくて、暑くて大変だった。それに、二期作は農地をだめにし、とにかく農作業はとても大変だった。」

Sさんの「二期作は農地をだめにする」という言葉が気になり、その原因を調べてみた。確かにSさんのいったとおり、二期作では、土壌が一年の2/3以上の時間水に浸るため、土壌の栄養が流失しやすくなり、土壌の持続可能性が破壊される。土壌は硬くなり、農作業に大きな負担をかけてしまう。

農民たちは農業の改革を強く求め、1978年から、松江区ほとんどの地域では「一期作・二毛作」を実行しはじめた。稲作では、品質の悪い「早粳米」をやめ、できるだけ優良品種の水稻を植える。麦作も同じく、品質のいい小麦を植え、大麦はほとんど作らなくなった。それに、国内では棉に対する需要が少なくなったため、ほとんどの地域では棉作をやめ、二毛作をおこなうようになった。

毎年の4月中旬に、施肥して、代掻きする。5月下旬までは、田植えを終える。7月末には、稲を収穫する。麦を植える前に、藁の根っこを焼き、堆肥にする（写真7）。昔、田植えは村の一大行事であり、時期を過ぎると、水稻の成長に大きな影響を与えるため、人々は緊張感を持って、お互いに助け合い、遅くとも必ず6月中旬までに田植えを終えるようにしていた。しかし、1990年代に入ると、種まき、田植え、稲刈りなどの作業はほとんど機械でおこなわれるようになり、農民たちが農地で過ごす時間は大幅に縮小した。

穀を取った藁は農民たちにさまざまな形で使われている。まず一年の使用量を予測し、必要な量だけを残し、一束一束に縛って、一箇所で崩さないように積み上げて保存する（写真8）。藁は主に、薪に使われていた。その他、藁縄を作ったり、枕の芯に充填したり、小屋を作ったりなどいろいろなところで使用されていた。しかし、経済発展につれて、生活用品は安く買えるようになり、藁も必要でなくなった。

写真7 藁焼き（CL村）



写真8 藁の保存（CL村）



5-6-2-2 副業

CL村では、昔、稲作や麦作は圧倒的に大規模におこなわれていたが、農地の回収に伴って、自留地の野菜栽培など小規模の農業だけをする人が増えてきている。CL村の土壌は品

質がよく、野菜の品種が多く、味もおいしいと評価されている。

(2008年2月25日インタビュー Lさん)

「昔は2ムー(約1332m²)の農地があって、そこから収入を得ていた。自留地(写真9)は自給自足の四季野菜を植えていた。農地が回収された後、時間が大きく余って、農作業に慣れていた私は家にじっとしてられない。だから、奥さんと自留地でできるだけ野菜をたくさんつくり、生産量を高めて、自給自足以外の余った分を市場で売る。周りの人たちもそうしている。皆ずっと農業をやっ



きた人たちなので、じっとしてられないよ。それに、今の市場では健康な野菜が求められているため、私もできるだけ化学肥料の使用を抑え、昔の伝統的な肥料を使い、新鮮で健康な野菜を作り始めている。いい野菜を作るのは誰でもできることではないよ。農業は農民でやらなければならないと思うよ。」

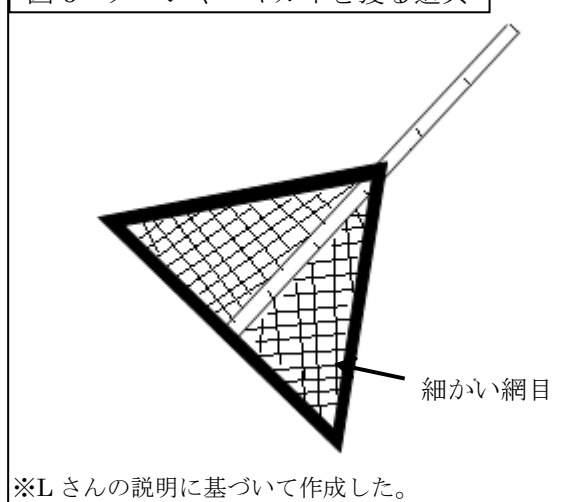
CL村では、Lさんのように、農業をあきらめたくない人がたくさんいた。家屋の周辺の少しの隙間でも丁寧に雑草を取り除き、野菜を植えているところもたくさん見かけた。

野菜栽培のほか、CL村は川が多いため、魚獲りや釣りも副業の一つであった。

(2008年2月25日インタビュー Lさん)

「川がきれいだったころ、魚やえびなど泳いでいるのがきれいにみえていた。午後5時ごろ、農業を終えて帰ってきて、夕飯までまだ時間がある時、良く魚を捕りに行って、夕飯のおかずに使っていた。漁猟道具などはいらないよ。運がよければ、バケツを使うだけで簡単に取れていた。しかし、いつの間にか、川が汚くなって、魚も少なくなった。この2、3年、一度も行ったこと

図6 タニシやマキガイを獲る道具



ない。タニシやマキガイ拾いは今でもよく行く。浅い川の川沿いでよく獲れる。ちょっと深い川だと、三角の道具を使う(図6)。獲ったタニシやマキガイを一晩水で飼って、泥砂など吐かせる。食べられなかった分は市場で売り出す。」

Lさんは野菜栽培や魚獲り、タニシ拾いなどの話をしている時、とても楽しそうな表情で

あった。彼にとって、農業や副農業は仕方なくしているのではなく、これは彼の職業であり、生活であり、趣味であり、経験であり、誇りでもあるのではないだろうか。

また、女性は農業を手伝う以外に、主に家で紡織と家畜の飼養などの副業をおこなっていた。

(2008年2月26日インタビュー Xさん)

「自分で植えた棉を収穫して、棉から糸をつくり、織機を使って、布を織っていた。昔、家中の布団、服などは全て手作りだった。私は10歳頃から母に教わって、紡織の手伝いをしはじめた。とても複雑な過程で、よく失敗していた。でも、自分の手で初めてできた布をみて、本当に感動した。布を作りにはとても大変な作業で、布団や服など破れても捨てられなくて、何度も何度も繕って使っていた。」

昔は皆そういう気持ちを持って、物を大事にしていたけれども、大量生産・大量消費に伴って、物は楽に手に入るようになり、物を大事に扱う意識も薄くなってきた。その結果、大量な資源が無駄にされ、さまざまな資源危機を引き起こしてしまった。だから、昔を振り返って、自然から得たものに知恵を加え、苦労して作った物を大事に使うという感情を喚起させ、人と自然の深いかかわり及びつながりを現代あるいは未来の人々に理解してもらうことが必要ではないだろうか。

5-6-3 遊び

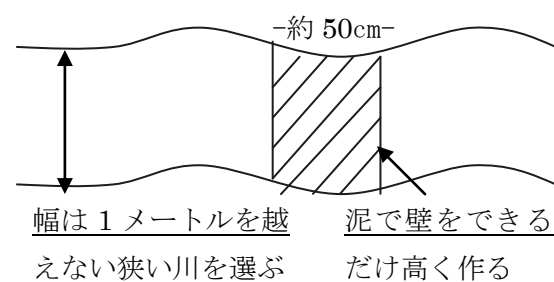
第2章で指摘したように、自然の中に生活を営む人たちにとって、自然から食料を得ることは生計のためだけではない。例えば「マイナー・サブシステム」と呼ばれている活動は主たる生業や副業と違って、経済的な価値より、娯楽や遊びなどの精神的な性質が大きい。調査では、CL村も「マイナー・サブシステム」に近い活動がおこなわれていることがわかった。前節で述べた「タニシやマキガイ拾い」はその一つだと理解したい。危険性が低く、技能の要求も高くないため、子供も女性も年寄りも簡単にできる。川の状況によって、獲れる量は違ってくるが、大体家族の食卓に出る一皿ぐらいの量である。経済効果は非常に小さいけれども、自分の手で自然から食物をただで得られ、家族に貢献できたという精神上的喜びが深く響くと調査で明らかになった。

それに、もう一つそれと近い遊びを紹介したい。この遊びは川辺でおこなわれる魚つかみのことをいい、比較的の高い技能と経験が必要である。

(2008 年 2 月 26 日インタビュー K さん)

「昔は魚網を買うお金がないから、そのまま手で獲っていた。子供の時、兄たちとよく『靠沟』をしに行った。小川(狭い&浅い川)を選んで、泥で2列の壁を作り(幅は約 50cm)、川の流れを堰き止める。ちゃんと壁ができれば、壁に囲まれた水を取り出し、中にある魚をつかむ(図 7)。泥壁は丁寧に作らないと、すぐ崩れちゃう。だから、一人では無理だ。参加する人は多ければ多いほどいい。昔、夏休みによく兄たちや友たちと一緒にやっていた。魚だけではなく、えびやタニシ、マキガイ、あと名前もよく知らないような細長い小魚もよく取れていた。獲れる量はあまり多くないけど、皆と一緒に遊びながらやって、終わったら川で泳ぎながら体を洗って、とても楽しかった。今はもうできないよ。川が汚いから、魚もない。」

図 7 『靠沟』イメージ図



※K さんの説明に基づいて作成した。

「靠沟」について聞き取り調査のおこなった結果、ほとんどの人は経験したことある。「靠沟」のほか、「靠塘」、「靠浜」という呼び方もある。呼び方はいろいろだが、やり方はほぼ同じである。子供たちにとって、これは完全に遊びの一つであるが、大人たちはもっと明確な目的性を持って、自分の経験や技能を活かしておこなっていた。

(2008 年 2 月 26 日インタビュー K さん)

「大人になってからもよくやっていた。でも農作業があるので、雨の日など農作業ができない時だけ、自分の子供を連れて、一緒に『靠沟』しに行く。雨の日は、川の水がきれいで、よくみえる。それに、水中の空気が薄いので、魚は浮かび上がってきて、獲りやすい。『靠沟』で獲った魚や他のものは大体その日のおかずになる。子供たちもすごく喜ぶ。」

調査では、『靠沟』を含めて、魚獲り、釣りなどの遊びはこの 10 年、大人も子供もほとんどしなくなった。仲間と一緒に自然や田んぼの中で、動物や生き物を観察したり、捕っ

て遊んだりことも現在の子供たちと無縁になりつつある。

嘉田由紀子は、哲学者の内山節の「自然の衰退が人間の自然性の衰退と関係している」という観点を引用し、「自然の衰退」を「生物種の質的量的減少」、「人間の自然性＝人間性の衰退」を「遊び文化の多様性の喪失」と理解し、自然の衰退が文化の衰退を伴っていて、文化の衰退は精神の衰退とつながっていると主張した。地域の環境と文化の中に生まれた遊びも一種の文化と考えられる。しかし、こういった遊び文化は現世代の子供たちに受け継がれていない。現在の子供は、コンピューターゲームや電子ゲームなど仮想の世界の中で遊ぶ傾向がある。機械があれば、一人で狭い空間の中で、長時間楽しむことができる。昔のように、自然という広い世界の中で、自然を相手に遊びながら身につく「物に対する好奇心」、「物をさがす発見力」、「物を獲るための経験と決断力」などの自然的な本能は現代コンピューターゲームや電子ゲームの世界では得られにくい。（嘉田、2000年）

千賀裕太郎は「よみがえれ—水辺・里山・田園」（千賀、1995年）の中で、緑、土、水など豊富な自然空間で遊ばせることによって、精神障害児が快復した例を使い、自然との触れ合いは精神の豊かさと深くかかわっていることを強調していた。人と自然との関係性を見直すには、「自然との遊び」という領域に目を向けることが非常に大切なことではないのであろうか。

5-7 地域に生まれた伝統、文化とその他¹⁸

前にも触れたように、松江区地域は悠久な歴史を持っており、農業や漁業などの生産活動に携わる人々の生活から、多彩な伝統や文化が生まれ、歴史的な経緯の中で消失したものもあるが、受け継がれてきた部分もたくさんみられる。

5-7-1 松江名物——松江スズキ

多くの歴史文献では、松江地域を「魚米之郷（水産物や米の豊かな地域）」と称している。松江地域は優越した地理条件と豊富な水資源に恵まれ、昔から農業と漁業が盛んで、全国的にも有名である。特に「松江の四鰓鱸魚（四つ鰓のスズキ、以下『松江スズキ』と略称する。）」（写真 10）¹⁹の名は今でも高い。文献の記載では、昔、松江スズキは珍品として、貴賓や重



¹⁸ 主に「民俗上海——松江巻」（尹継佐、2007年、上海文化出版社）を参考に整理したものである。

¹⁹ 写真の出典：「民俗上海——松江巻」（尹継佐、2007年、上海文化出版社）

要な来客をもてなすための料理であった。唐の時代に、杜宝という人が「大業拾遺録（大業雜記）」という本では、「六年，吳郡獻松江鲈魚乾脰，鲈魚肉白如雪，不腥，所謂金齏玉鱠，东南之佳味也。（六年の間に、吳という国は松江スズキを貢ぎ物として献上していた。松江スズキの肉は雪のように真っ白で、生臭い匂いもなく、非常に上等なご馳走である）」と高く評価していた。歴史上有名な医薬者李時珍の大著「本草綱目」でも、松江のスズキの栄養価値について、「松江鲈魚，补五脏，益筋骨，和肠胃，……多食宜人。（松江スズキは五臓、筋骨、胃腸、肝臓や腎臓に有益し、……よく食べると体に良い。）」と明記していた。ところが、残念なことに、経済発展につれ、河川が汚染され、松江スズキは激減した。今、松江スズキは絶滅危惧種と規定され、政府は大量な人力と財力を使って、人工的な繁殖に取り組んでいる。

松江スズキは高価な食材であるため、庶民の食卓にはあまり出なかったが、他の魚介類は品種が豊富で、地域の人たちはよく自ら魚などを獲って、さまざまな調理法でおいしく食べていたことがと調査で明らかになった。しかし、この10年、漁業の衰退や川の汚染などが原因で、魚を獲る人も少なくなり、魚料理もあまり頻繁に食卓に出ない家庭が増えてきた。（尹継佐、2007年）

5-7-2 松江の紡織業

歴史上、松江地域は「衣被天下（織物の有名な地域）」とも称されていた。1200年頃から、松江地域では既に棉を大量に植えていたが、道具と技術の欠乏により、家庭紡織業も長期間にわたって普及できなかった。1290年代ごろ、松江地域出身の紡織専門家——黄道婆という女性がよその地方で勉強した紡織技術を持って帰郷し、紡織機械を改良し、積極的に地域の女性たちに紡織技術を教えた。その後、紡織技術は松江地域で広く広がり、特に棉の布は仕立てが良く、長年貢ぎ物として朝廷にささげられていた。何百年の間に、紡織の技術は飛躍的な発展を遂げ、松江地域は中国の紡織の中心地となった。どの家も紡織機を持っていて、どの家の女性も紡織をしていた。女性は家庭の生計に大きな貢献をしていたため、松江地域では女性の地位も比較的高かったとみられている。清²⁰の時代以降、紡織業は衰え始め、近代化につれて、家庭紡織業も家庭から姿を消してしまった。写真11は調査地で、30年前の布をずっと保存してきた81歳の方の家で撮影したものである。

今の松江区には、家庭紡織はほとんど残っ

写真 11 自家製の綿布



²⁰ 清：王朝の名。（1636年～1911年）。

ていないが、国内の有名な紡織品メーカーは多数集まっており、それも松江地域の紡織文化の背景と関係あるのではないだろうか。

5-7-3 農業から生まれた文化²¹

松江地域の民謡には、農民の生活や田園風景を描く内容が多い。例えば、農民の忙しい一年を描いた「農謡」という歌が歌い継がれた。

正月里搓繩結牽籬，	翻訳	正月には縄を結って、まがきを作る；
二月里搭元豆岔花地，		二月にはインゲン豆棚をかけて、綿の農地を掘り返す；
三月里割大麦开河泥，		三月には麦を刈って、川底の泥を運び出す；
四月里落秧挑車基，		四月には種を蒔いて、ちりとりを持ち上げる（農作業をする）；
五月里手挿黄秧往後退，		五月には田植えをしながら後退する；
六月里雪白大腿陷在烂泥里，		六月には両足が泥の中に嵌る（農作業をする）；
七月里摇空船載黄泥，		七月には空き船をこいで、黄砂を積み込む；
八月里挑菜花壳花箕，		八月には野菜や花を刈って、花の箕を売る；
九月里割新稻連根起，		九月には新稲（第一期の稲）を刈って、根こそぎにする；
十月里牵砬攢稻闹市里，		十月にはわらを片付けて、もみすりをする；
十一月里家家户户打白米，		十一月にはどの家も米をうすでつく；
十二月里财主人家收租米。		十二月には地主が地代を催促しにくる（封建制度の時）。

それに、農事や気象にかかわることわざもたくさんあり、その中に、農民たちによる農業の営みから得たさまざまな経験と知恵が含まれている。これらのことわざは文化的な価値だけではなく、現在の農業研究にも大変意味があるとみられている。例えば、野菜に関することわざがある。

深種茄子浅栽葱，	翻訳	茄子は深く植え、葱は浅めに植える；
種菜不用問，勤澆水多上糞，		野菜作りはいうまでもなく、水や肥やしを頻繁にやる；
蘿卜性情躁，常要水来澆，		人参は気が短いので、よく水をやらなくてはならない；
霜降拔葱，不拔要空，		霜降の時期に葱を抜かないとなくなってしなう；
霜打雪压青菜甜。		霜や雪を浴びるとチンゲンサイは甘くなる。

この野菜作りの鉄則は今でも変わっておらず、まさに代々伝わってきた先人の知恵である。それから、農業と深くかかわる気象のことを表すことわざも多く、今まで伝唱されて

²¹ 主に「松江文化志」（編写組、2001年、百家出版社）を参考に整理したものである。

きた。例えば、「東北風，雨太公。（東北風が吹くと、雨が降る。）」、「亮星照烂地，明朝仍有雨。（明るい星がたくさん出ると、明日朝はまた雨が降る。）」、「泥鱸打滾雨来臨（ドジョウが地面にのた打ち回ると、雨が来る。）」などなど、多く挙げられる。

6 都市型農業における人と自然との関係性

6-1 「農」からみた人と自然との関係性

第5章では、CL村をモデルに、農村の現状及び農民たちの生活の現状を紹介し、また聞き取り調査を通して、昔からの農民たちと自然とのかかわり及びその変遷について整理してみた。

当初、人間と自然との関係は比較的単純であった。狩猟、採取などを通して、自然から直接食料を得て、自然の資源の有無に影響される不安定な生活をしていた。次第に、人間は自然の規律を把握し、その規律に従って、手を加え、安定的な生活ができるようになった。その過程で積み重ねられた経験や知恵は代々伝えられ、漁業や農業などの形で発展してきた。また、漁業や農業なども単なる生計のための手段ではなく、より多様な意味を含む概念となった。人は自然に働きかけ、生活を成り立たせると同時に、自分の精神を豊かにし、自然を利用すると同時に自然を大事にしていた。

例えば、CL村の事例では、昔の人たちにとって、川水は飲み水であり、洗濯用水であり、生活の主要な水源であった。また、水辺で魚獲りや貝拾いをしたり、仲間と一緒に水泳や水遊びをするのも生活の一部であった。川は村の人々の生活と深くかかわっていて、彼らにとって、川は不可欠な存在であり、水辺も大事な場所であった。

事例の中で、紡織という副業も紹介した。農民たちは自分で植えていた棉から布を作り、さらに加工してさまざまな品物を作っていた。特に女性たちは紡織をすることで、家計に大きな貢献ができた。また、紡織は単に収入を得るための活動ではなかった。糸の染色や布で物づくりをするのは個人のセンスや能力によって、出来も違ってくる。大事な人のために贈り物をする時、あるいは大事な祭りや儀式がある時、女性たちはいつも主役となり、自分の手で綺麗で実用的なものを作っていた。紡織は非常に大変な作業であるが、その代わりに、作る人にとって得られる精神的なものも大きいのであろう。

自然から直接資源を得る魚獲りであれ、自然の資源に手を加えて物を作る紡織であれ、いずれも人と自然との深い関係性を示していた。この関係性は、人間が中心か、自然が中心かということではなく、人と自然は全体の中にかかわりながら共存していることを表していた。

しかし、近代になって、こういう全体的なかかわりは断片的になり、さらになくなっていく傾向がある。CL村の事例からもそういう傾向がみられている。水道水を使うようにな

ってから、人は川や水辺から遠ざかってしまった。川が汚くなり、昔のように魚つかみや水泳、水遊びをする人もほとんどいなくなった。それに、衣服が安く買えるようになってから、家庭紡織業も消えてしまい、物事を大事にする意識も薄くなった。さらに、CL 村の農民たちは農業もできなくなる危機に直面している。代々伝わってきた農民の経験や知恵も受け継がれない可能性がある。

人と自然との関係性の変化は自然環境の変化を引き起こし、さまざまな環境問題の引き金となった。そこで、いかに人と自然との全体的なかかわりを回復させるかが環境問題を解決する重要な鍵である。

ただし、人と自然との全体のかかわりを回復させることは、昔の伝統的な農耕生活に戻ることではない。ここで強調したいのは、人と自然との間に、あらゆる関係性を持つことが大事ということである。例えば、我々が着ている服はデザイナーが設計して、機械で作上げたという短いスケールで考えるのではなく、自然から繊維の材料を採ってきたことを忘れてはいけない。自分の生活の中に、こういう自然との接点をみつけ出し、その接点から自然との関係性を延長させることこそ大切ではないだろうか。

環境倫理学の議論の中でも、環境の持続性ということ考えた時、自然環境の持続性だけでなく、社会的環境や精神的環境の持続性を含めて、総合的に捉えるべきだという主張がある。

6-2 環境倫理学の視点からの人と自然とのかかわりの重要性

6-2-1 「環境持続性」・「社会的公正」・「存在の豊かさ」

ここで、まず環境倫理学での思想について、もう少し詳しくみてみたい。

1970 年ごろ、アメリカを中心に始まった環境倫理学は人間中心主義を批判し、人間非中心主義の価値論を探り続けてきた。しかし、地球環境問題のグローバル化につれて、人間中心主義と人間非中心主義という二分法で議論するのはますます困難になった。グーハ (Ramachandra Guha) の指摘では、地球が抱えている基本的な環境問題は先進国による資源の過剰消費という問題である。アメリカの環境倫理学の背景となる「原生自然 (Wilderness) 保護運動」の思想をそのまま途上国に適用すると、地域の自然資源を利用して生活を営む人たちを生活圏から排除し、より困窮状態に陥れることになる」と批判された。1980 年代後半から、アメリカで発生した公害問題と環境的人種差別問題を機に、環境汚染・環境破壊が差別と政策上の不正義に深くかかわっていることが明らかになり、草根環境主義といった環境正義を主張する運動が始まり、世界にも広まった。1992 年にリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議 (UNCED: 地球サミット) では、「持続性」と「公正」のふたつの概念に基づく「国際 NGO 条約」が制定された。1997 年にメルボルンで開かれた「環境的正義: 21 世紀に向けた地球的倫理」という国際会議でも、多数の学

者が集まり、環境正義や社会正義などの問題を幅広く議論していた。

フランスの思想家・精神分析学者フェリックス・ガタリ（Félix Guattari）は「三つのエコロジー」という著書の中で、環境と社会的諸関係と人間的主観性という三つの作用領域を提示し、環境・社会体・精神から環境問題を考えるべきだと指摘した。井上有一（1997年）もこのみっつのエコロジーに対応する「環境持続性」「社会的公正」「存在の豊かさ」概念を提示している。井上（1997年）によると、環境持続性と社会的公正は存在の豊かさの前提条件である。自然環境を失ったら、人間の存在自体が困難になる。環境持続性は現世代の人にも、未来世代の人にも重大な意味を持っている。豊かな自然と持続可能な自然があつてこそ、人間の存在の豊かさの実現が可能になる。同時に、社会的公正も存在の豊かさの実現につながっている。不平等な扱いをされると、存在の豊かさを感じにくいのは当然のことである。ここで留意すべきなのは、環境持続性と社会的公正は対立的に考えるのではなく、相補的な関係にあると考える必要がある。社会的公正を考慮しつつ、民主的・市民的な価値を尊重し意識決定や政治参加をおこなう場合には、この三つの原理は共に実現されるのではないか。（井上、1997年）

しかし、意識決定や政治参加には人間の主観性という問題が絡んでくる。個人の主観性をあまりに重視すると、全体の豊かさや幸福は実現できないのではないかという考えがある。確かに「存在の豊かさ」を考える際、個々の存在は独立のものとして先行的に存在するのではなく、ホリスティックな世界観は前提であり、個々間の関係性、他者との連続性、一体性に基礎を置いている。ところが、それは個の全体への埋没、個としての存在の抹殺を意味するわけではない。他者との連続性、一体性を自覚して生きていくことに、自己の成長、存在の意味そのものもみ出すことができる。「他者と心理的に同一化することにより、自分自身の身体という境界を越えて自己を拡大し、狭い自我を超えた『エコロジカルな自己』と呼ぶ自己を実現していくことを、成長であり豊かな存在の実現である。」

（井上、1997年：17）すなわち、「存在の豊かさ」の実現には個々の主観性を中心として考えるよりも、個と個の関係、あるいは個の主観性と個の主観性のつながり、いわゆる「間主観性（Intersubjectivity）」と呼ばれている部分をみつけ出すことこそ、全体の豊かさの実現が可能になるのであろう。

これは鬼頭秀一の「かかわりの全体性」（鬼頭、1996年）という概念にも近似している。現在我々の周りに起きている環境問題はほとんど人々の生活と絡み合っている。このような環境問題を研究するには、人間と自然との関係性、さらに人間の営みを考察することから出発しなければならない。それに、人間の営みの中に、農業のような自然への働き、あるいは自然の資源に依存する狩猟、牧畜など、いわゆる「生業」という部分は大変重要な存在である。生業という活動を通して、人間と人間、人間と自然はある安定な関係性を築き、秩序のある社会を作り出した。生業の破壊は自然環境の破壊と深くかかわっていることも分かってきている。（鬼頭、1996年）

人間と自然の二分法で環境問題を解決するのはもはや不可能である。代わりに人間と自

然の間の「かかわり」という関係性を全体的に捉えることが環境問題を理解する一つのキーワードだといえる。（鬼頭、1996 年）現在、技術産業化、現代化につれて、人間は自然からどんどん切り離され、自然とのかかわりは部分的になりつつある。自然と共生する意識も薄くなり、さまざまな環境問題を引き起こすことになる。この断片的なかかわりをいかにつないで、全体的なかかわりを回復させるかことは重要な鍵である。また、それを実現するためには、まず伝統社会に暮らす人たち、あるいは自然の中に生業を営む人たちの生活に目を向かなければならない。彼らの生活にかかわる社会的な側面と文化や宗教などの精神的な側面に分析と検討を加え、人と自然、人と人のかかわりの全体性をつなぐものを見出すことこそ、環境問題の解決にもっとも重要なポイントである。（鬼頭、1996 年）

6-2-2 多様な意味を持つ「生業」

「『生業』は民俗学で一般的に用いられる用語であり、ときに生産と並立されて『生産・生業』と使われるように、人が生計を維持するために必要になる仕事を総称する概念として用いられている。……要するに人の暮らしを支えるための生産労働はすべて含むといっても良い。だから当然、職業に騒動する場合もある。ただし、ここで問題になるのは、生業は職業とはいえない労働も含んでいるということである。」（湯川、1996 年：272-276）事例を用いて説明するとともに分かりやすいかもしれない。上海市金山区農業園開発で移住された農民たちはマンションで近代的な生活ができるようになっているが、わざわざ荒地を開墾して、少しでも農業をしようとしている。わずかな農地で生産量が限られているし、家計にも大した貢献ができないため、当然「仕事」とはいえない。しかし、農地の面積が小さいにもかかわらず、雨などの悪天候の予報を聞くと、野菜の成長の心配をする。彼らは生活の一部のように、毎日農地に通っている。

「生業」を単に生計を立てるための手段だと考察するのは不十分である。生業は「遊び」や「娯楽」など人の精神を支える部分とも深くかかわっている。これは文化人類学や民俗学の中に提起されている「マイナー・サブシステム」という概念も説明できる。「マイナー・サブシステム」とは、「狩猟採集、農耕、牧畜という三つの生活様式が、重要な生業活動として顕示されるにしても、実際にこれらの生活様式を実践している人たちは、単純にそのいずれかの活動にだけ、従事しているわけではない。肉を売ったり、他の生産物と交換する狩猟民もいれば、罾による小動物の捕獲や川での漁業を重要な副次的な生業活動としている農耕民もいる。」（松井、1998 年：247-248）というように、主たる生業とは異なり、経済的な価値が小さいわりに、娯楽や遊びの性質が大きい。特定の地域の自然や環境の特徴を観察し、熟練した技法と経験を使って物を獲得する。取れた物の量は決して多くないが、楽しみや喜びといった情緒的な価値が大きく得られるのは「マイナー・サブシステム」という活動の特徴である。その結果、「自然の中に体を置いて、その対象を待ち、追い、捕らえ、あるいは集めることは、毎年繰り返されることによって、身体

の深いところに記憶として沈殿していくことになる。」（松井、1998 年：265）このように、「マイナー・サブシステム」の活動を通して、その身体性をもって、周りの世界の中に、自己の存在を確認でき、存在の豊かさを感じるようになると考えられる。

しかし、現在、「マイナー・サブシステム」の経験や技法などの伝承を可能にしていた社会制度や精神的な支えは失われる傾向にある。前節でも述べたように、人間は自然から離れ、自然との関係性が切れてしまい、その結果、さまざまな環境問題を引き起した。金山区現代農業園の開発や「中華村の農家楽」の活動も、農民と農業、つまり人と人、人と自然のかかわりを軽視していた。まだ開発されていない CL 村でも、昔のような人と自然とのかかわりが薄れている傾向がみられている。

したがって、環境問題は単に環境持続性の側面だけではなく、「それぞれ地域で続けられてきた多様な営みが保障されるような、社会的に構成なあり方を考えていくべきだということである。」（鬼頭、1999 年：14）現代農業園におけるグリーン・ツーリズムの活動はまさに、このような人と自然との関係性をつなぐための方法の一つである。

6-3 「都市型農業」の開発のあり方の再考察

環境倫理学の視点からみると、現代農業園の開発は持続可能な農業であり、環境持続に大きな役割を果たすとみられている。しかし、開発がもたらしてきた社会的な問題と開発される側の精神的環境の問題を是正しない限り、現代農業園の開発、あるいは現代農業園を唯一の展開方法とする都市型農業が期待している環境持続性の実現は難しい。

確かに現在の中国の政策や国情を考えると、大規模な現代農業園が一番実現しやすい形態であろう。政府が発起人、あるいは世話人となっているため、開発の際に、土地の収用と転用、企業の誘致及び今後の運営管理などは比較的に行進しやすいのである。且つ現代農業園は森林都市や市民農園などの都市農業より、高い経済効果も期待できる。

しかし、農民たちはまったく知らない場所に移住させられ、自然とかかわる媒介として存在する農村環境と農地を失うことで、自然とのかかわりも切れてしまう。確かに農耕生活より移住した後は少し余裕のある生活ができるかもしれないが、自然に手をかけて生業を営む生活の中に、マイナー・サブシステムのような活動から得る精神的なものが失われてしまう。

「都市型農業」の開発に際しては、社会発展や経済向上だけの問題ではなく、そこに生活している人たちこそ一番考慮の対象とされるべきだ。農民たちを生活圏から排除するというやり方は、人間の持続的な生存のための都市型農業の理念と根本的に衝突している。持続可能な開発では未来世代の欲求を損なわずに、現在の世代の欲求も満たすような開発が要求されている。それに、現在の世代の中に、多くの人々のためだからといって、少数の人の利益を犠牲にする社会的に不公平なことも回避すべきだと指摘されている。（加藤、1998 年）

筆者の考えでは、中国の都市型農業の開発のあり方を再検討するためには、まず開発の主役を見直さなければならない。実際に、先進国の多くの事例では、都市農業はさまざまな様式で展開され、主役も必ずしも政府とは限らない。生産性を目指す技術農業園と現代農業園のほか、農民や市民が活躍する市民農園やレジャー農園などはいろいろなところで展開されている。都市農業は農村部と都市部の人々の関係性、人と自然とのかかわりを回復させるための有効な手段だとみられている。しかし、中国の今までの現代農業園の開発はそのかかわりをつなぐ機能を果たせなかったことにもかかわらず、昔から自然と深くかかわってきた農民たちを自然から強制的に切り離したともいえる。このような開発はまさに、今の中国で起きているさまざまな環境問題の起爆剤だと考えてもよい。

もちろん、開発をせずに、農民たちにずっと農業を営みながら伝統的な生活を送ってほしいと強制することも問題であろう。重要なのは、「生業」や「マイナー・サブシステム」、「遊び」などの活動がおこなわれる際に、人と人をつなぐ、あるいは人と社会をつなぐ関係性をみ出し、その関係性をいかにシステム化させ、都市型農業の開発で活用することではないだろうか。

終わりに 都市型農業の未来への展望

ここで検討しているような新しい形の都市型農業の実現は確かに容易なことではない。特に、すでに生活者を排除して作り上げられた現代農業園では、生活者たちを元の生活に戻させるのはほぼ不可能である。

ところが、今回の調査結果を見る限り、松江区 C 鎮 CL 村のような、まだ開発されていない地域では期待できるのではないだろうか。中国では、CL 村の人々のように、自然から得た知恵、経験、あるいは自然とかかわってきた思い出、記憶などを持っている人たちはまだ多くいる。発展に伴って、昔の伝統、文化、習慣の中には消えてしまったものもあるが、彼らの固執と感情でずっと守り続けられてきたものも多く残っている。確かに、伝統の農作業、魚獲り、自然との遊び方などは高度な技術機械と比べると、ごく普通にみえるが、その人と自然のかかわりから生まれた人と人、人と社会の関係性、いわゆる個々の精神的な豊かさは現代技術や機械ではなかなか得られないのではないだろうか。現世代の人々のためにも、未来世代のためにも、これらのものを守るべきである。

中国の現在の都市型農業の開発は、生産性から考えると、持続可能だといえるかもしれない。しかし、生活者を排除して、人と自然との関係性を切断させることは、逆にその持続性を損なうことになるのではないだろうか。人と自然との関係性をつなぐために、中国の都市型農業の開発において、生活者が主役となる観光・体験活動を取り入れるという方法が考えられる。すでに論じたように、さまざまな困難や課題はあるが、都市型農業の開発における飯山型のグリーン・ツーリズムの展開は十分可能である。これも本論文の主旨

である。

このような新規事業が立ち上げられることによって、はじめて、中国の豊富な資源、悠久な歴史、及び客好きな民族性に加え、中国の特色ある都市型農業を必ず実現することができるのではないだろうか。

【参考文献】

- 張放、2005 年、『都市農業与可持続発展』化学工業出版社
- 潘其雲、2005 年、「上海都市農業保護与可持続発展」、『上海農業学報』2005 年 4 期所収
- 李昌平、2002 年、『我向総理説実話』光明日報出版社
- 石田浩、2005 年、『中国農村の構造変動と三農問題——上海近郊農村実態調査分析』晃洋書房
- 石田浩、2000 年、『中国農村の開発戦略——農民は豊かになったのか』関西大学経済・政治研究所
- 石田浩、2003 年、「中国都市型農業の経済構造とその課題——上海郊外農村の貧困と兼業化」、関西大学『経済論集』第 53 巻第 2 号所収
- 王文亮、2003 年、『中国農民はなぜ貧しいのか』光文社
- 陸相欣、2006 年、『農村社会学』鄭州大学出版社
- 宗義湘、2007 年、『加入 WTO 前後中国農業政策の演变及効果』中国農業科技出版社
- 朱明德、2003 年、『都市型現代農業理論与实践』農業出版社
- 方志權・吳方衛、2008 年、『城市化進程与都市農業發展』上海財經大學
- 葉 軍、2006 年、「中国沿海地区での持続的発展可能な都市型農業」田中廣滋編『持続可能な地域社会実現への計画と戦略』所収、中央大学出版部
- 姜春雲、2005 年、『現代中国の農業政策』家の光協会
- 飯島伸子・鳥越皓之・長谷川公一・船橋晴俊、2001 年、『講座環境社会学第 1 巻——環境社会学の視点』有斐閣
- 小山邦武、1998 年、「農の持つ力の大きさを知って」、『長野県信州自治』1998 年 10 月号所収
- 山崎光博、2004 年、『グリーン・ツーリズムの現状と課題』筑波書房
- 青木辰司、2004 年、『グリーン・ツーリズム実践の社会学』丸善
- 沈鎮昭、2001 年、『中国農業全書——上海巻』中国農業出版社
- 尹繼佐、2007 年、『民俗上海——松江巻』上海文化出版社
- 編写組、2001 年、『松江文化志』百家出版社
- 傅紀新、1990 年、『松江概覧』上海人民出版社
- 俞永华、1989 年、『松江県農業志』松江県華亭印刷厂
- 何恵明、2005 年、『松江年鑑 2005』漢語大詞典出版社
- 嘉田由紀子・遊磨正秀、2000 年、『水辺遊びの生態学——琵琶湖地域の三世代の語りから』農山漁村文化協会
- 千賀裕太郎、1995 年、『よみがえれ——水辺・里山・田園』岩波書店
- 井上有一、1997 年、「エコロジーの三つの原理に関する考察」、『奈良産業大学紀要』所収
- 鬼頭秀一、1996 年、『自然保護を問いなおす——環境倫理とネットワーク』ちくま新書

鬼頭秀一、1999 年、「環境思想はグローバルからローカルへ、再び」、『新環境学が分かる』所収、朝日新聞社

湯川洋司、1996 年、「生業の相互関連」、『講座日本の民俗学5 生業民俗』所収、雄山閣出版株式会社

松井健、1997年、『自然の文化人類学』東京大学出版会

篠原徹、1998年、『民俗の技術——現代民俗学の視点1』朝倉書店

加藤尚武、1998 年、『環境と倫理——自然と人間の共生を求めて』有斐閣

編志組、1993 年、『松江県水利志』上海科学技術出版社

農林水産省農村振興局企画部農村政策課都市農業・地域交流室、2007年、『グリーン・ツーリズムの展開方向』

上海統計局、2000 年、『上海統計年鑑 2000』中国統計出版社

上海統計局、2001 年、『上海統計年鑑 2001』中国統計出版社

上海統計局、2002 年、『上海統計年鑑 2002』中国統計出版社

上海統計局、2003 年、『上海統計年鑑 2003』中国統計出版社

上海統計局、2004 年、『上海統計年鑑 2004』中国統計出版社

上海統計局、2005 年、『上海統計年鑑 2005』中国統計出版社

上海統計局、2006 年、『上海統計年鑑 2006』中国統計出版社

上海統計局、2007 年、『上海統計年鑑 2007』中国統計出版社

中和人民共和国国家統計局、2007 年、『中国統計年鑑 2007』中国統計出版社

『農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律』、1994 年制定、2005 年最終改正

【Web サイト】

中国統計（中国）：<http://www.stats.gov.cn/>

上海統計（中国）：<http://www.stats-sh.gov.cn/2005shtj/index.asp>

上海市政府（中国）：<http://www.shanghai.gov.cn/>

上海農業（中国）：<http://www.shac.gov.cn/>

上海市松江区政府（中国）：<http://www.songjiang.gov.cn:88/www/index.jsp>

上海市松江区 C 鎮政府（中国）：<http://cdz.songjiang.gov.cn/default.aspx>

上海市金山区 LX 鎮政府（中国）：<http://langxia.jinshan.gov.cn/newlangxia/index.asp>

財団法人都市農山漁村交流活性化機構グリーン・ツーリズム（日本）：<http://www.ohrai.jp/gt/>

農林水産省農村振興局企画部農村政策課都市農業・地域交流室（日本）：
<http://www.maff.go.jp/nouson/chiiki/gt/1aboutkt.html>

長野県飯山市（日本）：<http://www.city.iiyama.nagano.jp/index.asp>

フリー百科事典ウィキペディア（日本）：<http://ja.wikipedia.org/>

謝 辞

修士論文の執筆にあたって、多くの方々から、ご指導、ご協力をいただき、大変お世話になりました。

主査をしていただいた鬼頭秀一教授には、日頃より研究内容および方針について終始細やかなご助言、ご指導を賜り、ありがとうございました。先生の御指導なしには環境社会学の分野に触れることはできなかっただろうし、この論文を書き上げることもできなかったと思います。また、終始熱心に御指導、御鞭撻していただき、論文の構想から細かいところまで相談に乗ってくださった同大学同研究科同専攻の清水亮准教授に深く感謝いたします。

日頃の勉強から研究までさまざまな有益なアドバイスをくださった同研究室の博士課程の富田涼都先輩、二宮咲子先輩、それに、論文のチェックや言葉の校正などを手伝ってくださった同研究室の後輩たちにも感謝いたします。

さらに、この研究は、フィールド調査なしには成り立ちません。フィールド調査においては、心よく聞き取り調査や質問調査に応じてくださった中国上海市松江区C鎮CL村の方々、それと日本長野県飯山市の方々に厚く御礼を申し上げます。私に家族のように接して下さって、本当にありがとうございました。皆様のおかげで、研究を無事に進めることができました。

最後に、今まで、自分を支え、励ましてくれた友人や知人、留学に理解と献身的な協力をいただいた家族、そして、ここまで読んでくださった方を含めお世話になった方全員にこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。